

ヨハネの默示録の読み方の解説

探求への第一歩としての一例

第五版 2022/8/21 バージョン

黒木俊宏

この資料は個人の聖典研究の助けとして黒木俊宏が個人的に作成したものであり、
末日聖徒イエス・キリスト教会の公式出版物ではありません。

【重要な仮説の設定】

ヨハネの黙示録は新約聖書の中で最も難解な書物であり、聖典全体から見ればイザヤ書の次に難解な書物であるということは、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員のみならず、世界中のクリスチャンに共通する理解だと思います。しかし、黙示録がイザヤ書と大きく異なる点は、ヨハネには彼本人が書いた他の書が存在するということです。「ヨハネによる福音書」、「ヨハネの第一の手紙」、「ヨハネの第二の手紙」、「ヨハネの第三の手紙」があり、これらに共通する点は「決して難解な書物ではない」ということです。ではなぜ「黙示録」だけがこれほど難解な書物になってしまったのでしょうか？

実はその難解な謎をさらに難しくする事実が歴史には残されています。ヨハネの黙示録といえば、世界中の人人が聖書の一番最後の書物であることは知っています。しかし、実際には最後に記録された書物では無いこともわかっているのです。

ヨハネは黙示録の中で自分がこの示現を受けたのはパトモス島と呼ばれる政治犯用の流刑島であったことが記録されています。ローマの皇帝ドミティアヌスは紀元81-96年までの短い在位期間中に、クリスチャンの最後の指導者であり、使徒であったヨハネをこの小さな島に幽閉しました。黙示録の示現が授けられたのはこの期間中のことでした。紀元96年に皇帝ドミティアヌスは暗殺され、ネルウアが次の皇帝となったとき、彼は恩赦を下してヨハネを流刑から開放しました。

このことは解放後のヨハネがポリュカルポスと呼ばれる若者としばらくスミルナで過ごし、そのポリュカルポスが晩年に自分の弟子のエイレナイオスに伝えた内容としてエイレナイオス自身の記録に残されています。この記録には大変重要な手がかりが残されていました。彼の記録によればパトモス島から解放されたヨハネが最初に手掛けたものは「黙示録」だったということです。そして次に「ヨハネによる福音書」、そして第一、第二、第三の手紙が書かれたと記録されています(“What do we know of the life of John the Apostle after the day of Pentecost? Why was he exiled to the Isle of Patmos?” Ensign January 1984)。このことが私達に新たな謎を投げかけています。同じ人が同じ時代に、しかも最初に黙示録を書いたのであれば、なぜその書物だけがこれほど難しい内容になったのか。もちろん、ヨハネは書こうと思えば他の書物と同じような私達にわかりやすい言葉で書くこともできたでしょう。しかし、彼がもし目的を持ってそれを難しい言葉書いたのであれば、それを読む私達はその意図を理解する必要があります。

モルモン書にはそれを紐解く鍵が残されています。ニーファイが示現の中で、ヨハネの黙示録の内容と同じものであろうと思われる「将来に（あるいは最後に）起こること」を見せられた時、天使からその見たことを書いてはならないと告げられました。それを書く人物は定められており、その名が「ヨハネ」であることを知らされたからです（第一ニーファイ書14:19-27）。そのことをわざわざ金属の板に書き残したニーファイにはそれを読む読者に対し「私は書くことができないが、そこに私の見たものが書いてある」と伝えたい意図があったのではないかと考えられます。別の言い方をすれば、ニーファイは将来自分の記録を読む人々が、同時にヨハネの書くものも手にしているということを知っていたということではないでしょうか。

モルモン書は不思議な書物で、聖書の失われた真理を回復するという目的で私達に与えられたと末日聖徒は理解していますが、そのモルモン書が逆に聖書から「読みなさい」と訴えかけてくる二つの書物があり、それが「イザヤ書」と「ヨハネの黙示録」です。この二つに共通するのは前述の通り、「難解さ」です。しかし、モルモン書の真鍮板の引用箇所からも比較して理解できるように、イザヤ書はその難解さ故に書き換えられたり失われたりすることはほとんどありませんでした。つまり、難しくすることで失ったり書き換えられたりすることを防ぐことができるの

で、イザヤやヨハネは『目的』を持って、意図して自分の書くものを難解にしたと考えられます。そのことは前述の通り、ヨハネの他の著書が難解ではないことからもうかがい知ることができます。ですからその目的を予め理解した上で読み解き始めれば、私達は彼らの書き残した真理にたどり着ける可能性が出てくるのではないかでしょうか？

モルモン書や教義と聖約を読み続けるとここかしこに默示録やイザヤ書の読み方のヒントが書かれていることがわかります。それらすべてがこれらの二つの書物の読み方を説明していることに意味があるとすれば、そしてそれが神様のご計画であるとすれば、それは疑うことなくそのモルモン書と教義と聖約を手にしている民、すなわち末日聖徒イエス・キリスト教会の会員に向けて書かれたということになります。これが私が今から説明していく默示録を読む上で重要な前提である「仮説」になります。他でもない私達にこれら二つの書物を読み解く責任があるとすれば、この仮説をアンカーにして読むことが解き明かしの重要な鍵になるはずです。

ですから私が今から説明していく「読み方」の解説では、その仮説に起点をおいて、默示録の迷宮に迷い込ませる「難解さ」に引きずり込まれていくことがないように、しっかりと起点を離れないように読める方法を書き記していきます。しかしながらこれは、あくまでも読み方の一つの例であり、皆さんの理解の助けとするものですから、これが全てではありません。熱心に探求すれば、皆さんは更に大いなるものを見いだすことでしょう（モルモン書8:12参照）。

最後にとても重要なことは、この仮説があなたの中で事実となるかどうかは、あなたがそこに書いてあることを祈りを通して、それを聖霊によって理解できるかどうかにかかっています。ヨハネが置いた難解さという罠は、読み手を迷わせる霧のようなものです。この霧の中を確実に、真っ直ぐに目的地にたどり着くためにはどうしても聖霊の助けが必要になります。なぜならヨハネもイザヤも私達が聖霊の助けを元に自分たちが書いたものを読み解くことを前提に書き残しているからです。

聖典研究において最も大切なことは、聖文の内容を理解することではありません。内容をよく理解した上で、更にその上にある、その作者が私達に伝えようとした神様の御心を聖霊によって知ることです。

「したがって、聴きなさい、おお、イスラエルの家に属するわたしの民よ。わたしの言葉に耳を傾けなさい。イザヤの言葉（あるいはヨハネの言葉）はあなたがたには分かりにくいが、預言の霊に満たされている人々には分かりやすい。」（第二ニーファイ書25:4）

ヨハネが見たものが何であるかを理解することは、末日聖徒にとってとても重要です。それは主が、私達が回復の業を実際にその目で見て、そして回復の起点となる聖典をその手に受ける時、すでにヨハネの見たものが始まっていることを知るであろうとおっしゃられているからです。

「その後、わたしが僕ヨハネに書き記させたわたしの啓示は、すべての民の目に明らかにされるであろう。覚えておきなさい。あなたがたはこれらのことを目にするとき、その啓示が実際に明らかにされる時が近いことが分かるであろう。したがって、あなたがたはこの記録を受けるとき、父の業が地の全面で始まっているのを知るであろう。」（エテル4:16-17）

ではその時に私達が知ることになるであろう神様の御心とは何でしょうか？それは默示録を他でもないヨハネが書いたという部分に秘密が隠されています。もし默示録が最初に立てた仮説のようすに末日聖徒に向けて書かれたものであるならば、なぜジョセフ・スミスや末日の預言者、あるいは実際にその示現を見たというニーファイや記録を埋めたモロナイではなく、末日聖徒よりも

2000年も前にいたヨハネが書き残す必要があったのでしょうか？その疑問はこの使徒ヨハネについて調べていく時に理解できるようになっています。

【ヨハネという人物について】

まず、なぜ他の誰でもなく、ヨハネが黙示録、すなわち「これから先の起こること」を書き残したのかを理解する必要があります。多くの人はヨハネがイエス・キリストの十二使徒の最後の生き残りだったからと考えるでしょうが、実はそれ以上の理由があります。そうでなければ、なぜわざわざモルモン書の中で「ヨハネが書く」と名前を出してまで宣言する必要があるのでしょうか。

ヨハネの生い立ちについては詳しくはわかつていませんが、ゼベダイという人の子供であり、同じく十二使徒の一人であったヤコブの兄弟であったことが知られています。もともとは魚をとる漁師でしたが、バプテスマのヨハネが現れると彼についていって弟子となります。その師であるヨハネからイエスに従って行くようにと勧められ、彼は兄弟ヤコブと共にキリストの弟子となり、やがてその忠実さ故に最初の十二使徒として選ばれます。はつきりとは書いてありませんが、他の使徒と比べると年齢的にも若かったようにも感じられます。

ヨハネについてはある一つのとても興味深い伝承が残されていました。それはペテロの問い合わせでイエス様が言わされた言葉の中に「たとい、私の来る時まで彼が生き残っていることを、わたしが望んだとしても・・・。」（ヨハネによる福音書21：22）という部分です。

この言葉によって現代に至るまで「ヨハネは死ななかつたのではないか」という伝承が伝わりました。そのため、モルモン書を金版から翻訳していたジョセフ・スマスとオリバー・カウドリーがこのことに対して疑問をいだき、ウリムとトンミムを使って神様に質問した時に、与えられた答えが、あの教義と聖約の第7章となつたのです。

この中で主がはつきりと、ヨハネは死ぬことがないと宣言されたことが分かります（1-3節）。更にここには大変興味深いことが書かれています。この7章は啓示ではなく（もちろん一つの啓示ではありますが）、前書きにも書かれている通り、ヨハネ本人が羊皮紙に自分の記録を書いたものをジョセフ・スマスが見て書き取ったものです。ですからヨハネ自身が自分の身に起こったことを書き残していると考えられます。

その中でヨハネは自分に与えられた使命をはつきりと見出しているようです。まず、イエス様の言葉の中に「彼（ヨハネ）は人々をわたしのものに連れて来ることを望んだ（4節）。」とあります。これだけでは伝道のことであるとも読むことができますが、言葉はさらに続きます。「わたしの愛する者（ヨハネ）はそれ以上のこと、すなわち、彼がこれまで行ってきたこと（イエス様たちと共におこなった伝道活動）よりもさらに大いなる業を人々の中で行うことを望んだ（5節）。」

伝道よりも大いなる業とはなんでしょうか？言葉は更に続きます。

「まことに、彼はさらに大いなる業を引き受けた。それゆえ、わたしは彼を燃える火のようにし、また仕える天使とする。地上に住んでいる救いを受け継ぐ者のために、彼は仕えるであろう（6節）。」

このヨハネ本人の記述からうかがえることは、彼が主イエス・キリストから「死ぬことがなく、この地上にとどまり、最後に主が栄光のうちに来られるその時まで、あることを行い続ける」と言わされたということです。ではその「あること」とは何でしょうか？これが彼が黙示録を書き残した最も重要な理由になります。なぜなら彼は自分が書いた黙示録の中で起こる出来事において、そこに登場する人々と共に自分が現世に留まって働くことを知っていたからです。

実はこの重要な彼に与えられた使命と目的は、はっきりと啓示によって私達末日聖徒には知らされています。それはジョセフが黙示録の翻訳について沢山の質問をしたときに、その答えとして与えられた教義と聖約77章に書いてあります。

77章の9節では東から上ってくる一人の天使について書かれていますが、この天使は「この人こそ、イスラエルの部族を集め、万事を元通りにするために来ることになっているエライヤスである。」と言及されています。エライヤスというのは人の名前でもあるのですが、同時に「キリストが来られる前にその備えをする者」という役割を持つ人を表す代名詞、あるいは称号としても使われます。イエス・キリストが再び来られる前にかならず起こることの一つに「イスラエルの集合（アブラハムの聖約を完成させるため）」があります。これは歴史の中ですべてのイスラエルが世界中に散らばって行ったことと、バプテスマを受けることによってイスラエルの家に養子縁組されることを考えれば、「全世界の義人の集合」とも言い換えることができるかもしれません。そしてその業を完成させる人物こそが、この天使だということが書いてあります。

さらに77章を読みすすめると、大変興味深いことが書かれています。それは14節。ヨハネが黙示録の中で小さな巻物を取って食べるシーンの解説です。その答えとして、それはヨハネがイスラエルのすべての種族を集めるという使命を引き受けたということの象徴であり、さらに面白いことに、こう書かれています。「見よ、この人こそ、書き記されているように、必ず来て万事を元通りにするエライヤスである。」つまりヨハネは示現の中で自分自身の果たす役割を眺めていることになります。

黙示録だけでは、このことを理解することができません。なぜなら彼は「見ている人」であり、「登場している人」とは別人として書かれているからです。しかし、この末日の啓示によって、私達は見ている人と登場している人が同一人物であることを知ることができるようになったのです。

ヨハネこそがこの世で最後まで生き残り、万事を元に戻してシオンの完成に携わり、最終的に彼の主であるイエス・キリストを迎える準備を整える天使だということが理解できれば、なぜ最後の時に起こるべきことを書き残すべき人物がヨハネだったのかが理解できると思います。

では、ここで考えていただきたいのですが、そのヨハネがなぜその出来事を難解な書物にして書き残し、現代にまで伝える必要があったのでしょうか？それはこの万物の回復は彼一人の力によって起こらないことを彼が知っていたからです。最後の時にあって、彼と共に働く者たちに向けて自分が見せてもらった神の計画を伝え、その作戦を理解させるために敵には読めないようにまるで暗号のように言葉を難解にして書き残しているとしたら、その伝えたい相手とは誰でしょうか？

ヨハネは黙示録の中でその共に働く人々を「聖徒」と呼んでいます。

最初の質問である「なぜヨハネという人物が選ばれて黙示録を書き残したのか？」に対する答えは、末日の時にあって主の業の最後の仕上げをする者が、召しを受けたヨハネとその時代の聖徒

たちであるために、この默示録はニーファイでも、イザヤでも、その他どの預言者でもなく、默示録の当事者であり、その業の代表者であるヨハネが書き残す必要があったということになります。

私達が彼と共に働く末日のイエス・キリストに仕える聖徒であることを理解した上で、この先を読んでいただけだと、より理解が進むと思います。

【默示録の構図】

初めて默示録を読む、あるいはあまり読み慣れていない人にとって默示録は取り付く場所さえない書物のように思えることでしょう。今まで皆さんのが読み慣れてきた新約聖書や他の聖典とは内容も書き方も、そして時間の流れさえも全く異なるからです。

ですから、ここに分かりやすいように默示録の構成を図で表してみました。默示録全体がこのような流れになっているのだと理解できれば、読んでいる間に今自分の居る場所が理解できやすくなると思います。

簡易説明図の方では末日聖徒が、默示録のどの部分にフォーカスを置いて読めばよいのかをわかりやすく図にまとめて表示しています。中でも 7 章と 10 章、そして 12-13 章が末日聖徒にとって特別な役割を果たしているのが理解できると思います。

默示録の構成図

第1章：ある日イエス・キリストがヨハネに突然の訪れる

第2-3章：ヨハネはキリストによって7つの教会（支部）へ、それぞれ手紙を書くよう内容を示された

ここから将来起ることがヨハネに示される

第4章：示現で天父のみ座と、そこに初めから存在していた神の最後の計画書（巻物）を見る

第5章：キリストがその巻物を受け取り、実行するのに唯一ふさわしい人物であると唱えられる

第6章：巻物に付いていた第一から第六までの封印が解かれる

第7章：使命を帯びた天使と集められた14万4千人の部族の話とそれに続く義人を見る

第8章：第七の封印が解かれるとラッパを持った7人の天使が現れる

第8-9と11章：7つのラッパが次々に吹き鳴らされる

第10章：現実の部分=>ヨハネが自分の使命を受け取る

第12-13章：解説の部分=>サタンの軍勢に対するキリストの教会とシオンの戦いの説明

第14-15章：最後の刈り入れの宣言が行われると別の7人の天使が災いの詰まった鉢を持って現れる

第16章：傾けられる7つの災いの鉢とそれによって起こる大災害

第17-18と20章：悪の王国が一日にして滅び、サタンが縛られる

第19章：キリストが花婿として花嫁である教会の元に来られる

人々の復活が始まる

第21-22章：シオンが完成し、義人がキリスト共に住み、最後の栄光を受ける

7つの封印

7つのラッパ

7つの鉢

黙示録の構成図（簡易説明図）

第1章：イエス・キリストの突然の訪れ



第2-3章：7つの教会への手紙

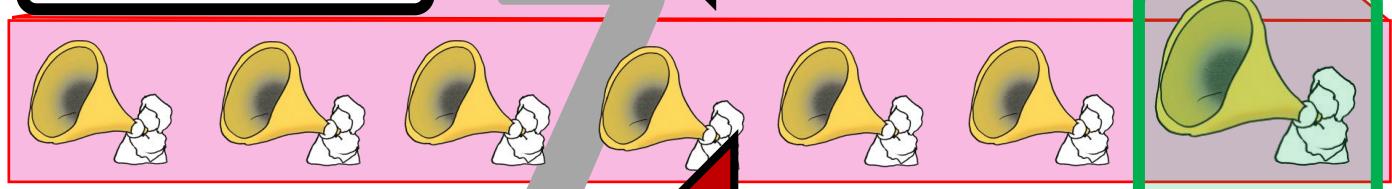
黙示録の示現

第4-8章：7つの封印



第7, 10章：ヨハネの召し

第8-14章：7つのラッパ



第12-13章：聖徒のための

解説書

第15-20章：7つの災いの鉢



第21-22章：シオンの完成



【第1章】イエス・キリストのおとずれ

第1章の最初では、他のヨハネの著書には見られない黙示録だけのある大きな特徴が出てきます。それはヨハネ自身が「この書を書いた人物は、私ヨハネです」と明言している部分です。ヨハネが黙示録を書いた後に福音書や手紙を書いた時には、自分が使徒ヨハネであると明確には宣言していないのに対し、黙示録ではこの書を書いたのは、自分ヨハネであるとはっきりと宣言しています。これはニーファイが「そのこと書く人物はヨハネ」と天使に言われて、それを書き残したことと大きく関わっていると思われます。なぜなら次に続く言葉が「これを聞いて、その中に書かれていることを守る者たちとは、幸いである（3節）。」と書かれてあり、予めヨハネはそれを読むべき複数の人たちが将来どこかに存在していることを知っていて、さらにその人達が自分の名前であるヨハネと言う名の人物が書いた啓示の記録を探し出そうとすることを知っていたからではないでしょうか。

更にヨハネはその人達に向けて「時が近づいているから（3節）」とこの黙示録を読むべき理由を説明しています。

ここで私達は最初に設定した「仮説」、すなわち「この黙示録は私達、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員に向けて書かれたものである」ということを当てはめてみると、この黙示録に書かれた言葉を読んで、従い守る者とは私達「末日聖徒」ということになります。そして私達はニーファイの言葉によって「ヨハネが書くもの」の中に末日の聖徒の行うべき業のヒントが隠されているということを知っており、そのメッセージを受け取るべきであるということを前提にして、この先を読み進めていきましょう。

4節から8節まではヨハネがごく最近自分が受けた、驚くべき示現によって知り得た情報を簡潔にまとめて、その感動を表しています。

黙示録の正確な年代や詳しい情報はわからないので、ヨハネは当時ローマ帝国の支配の中でキリストの教えを広げ続け、当時まだアジアと呼ばれていた現在のトルコの、特に西側で教会を設立していたと想定すれば、ここからが理解しやすくなります。ローマは命令を聞かずに伝道をし続けるキリストの使徒である（おそらくは最後の使徒）ヨハネに手を焼いていたことでしょう。それでローマが最終的に取った手段はヨハネを教会から物理的に引き離すということでした。



ヨハネは当時、ローマの政治体制に反対を唱えるような人間を囚人として流刑を行っていたパトモス島（エーゲ海にある小さな島）に送られ、そこで教会員から引き離された生活を送っていました。私達はいつヨハネの肉体が死ぬことのない体に変貌したのかを知りませんので、もしかするとその変貌が黙示録の啓示を受けた時に起こったとすれば、このときまでヨハネは普通の人であり、かなり年を重ねていたということも考えられます。またしばらく啓示が途絶えていて、教会員の信仰による苦しみ、ローマの弾圧を見続けてきたとしたら、この黙示録の栄光の示現を見たときの彼の喜びは計り知れないものがあったのかもしれません。

9節からはその驚きと喜びが大胆に描写されています。彼が見た驚くべき光景とその中に光輝いて立つ人物こそは、自分が主として崇めるイエス・キリストその人だったからです。

しかしヨハネはそのお方の持つ、あまりに偉大な栄光をどのように描写したらよいかわからなかつたようです。彼の知る限りの言葉を集めてなんとか書き残したキリストの表現は、一見とてもむずかしい文章のようにも思えますが、教義と聖約の110章でジョセフ・スミスたちが栄光の中の主を見たことを記録しようとして書いた（もちろん黙示録を参照しているとは思いますが）文章と大変類似しているので、逆に末日聖徒にとってはとても理解しやすい部分だと思います。

その御方が最初に言わされた言葉は、アジア（すなわち今のトルコ南西部）に存在している7つの教会（今で言えばステークのようなもの、この7つは環状道路でつながっていたと考えられている）に手紙をそれぞれに書き送りなさいというものでした。実際にそのメッセージはヨハネのパトモス島からの解放後に黙示録という巻物に添えて書かれてそれぞれの場所に送られたか、あるいは現在の黙示録と同じように書簡に書かれて、それぞれの場所で回覧され、それが後世にそのまま残されたということなのでしょう。

第1章の終わりにはこのように書かれて、第4章と繋がりますのでここではこの部分を覚えておいてください。

「そこで、あなたの見たこと、現在のこと、今後起ころうとすることを、書きとめなさい。」
(1:19)

【第2-3章】 七つの教会への手紙

ここではヨハネはキリストに命令に従って、7つの教会に向けて主から言わされた通りの言葉を書き綴っています。実際この部分を読む人たちは「昔存在した教会に向けての言葉を読んで、私達にどんな意味があるだろう」といぶかしく思うかもしれません。そこでここでも最初に設定したあの仮説、「この黙示録は私達、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員に向けて書かれたものである」を当てはめて考えてみましょう。

黙示録の示現の内容を知らせる前に、当時の教会員の様子を私達に知らせる目的があるとすれば、それは何でしょうか？

実はこの7つの手紙から2つの大きなメッセージをヨハネから受け取ることができます。それはある意味、この後第4章から実際に彼の見た驚くべき啓示を難解な言葉で書くとわかっているヨハネにとって、この7つの手紙はそれを理解するための私達に向けた「取り扱い説明」であると考えることもできます。

第一のメッセージは、もうすでにこの当時から「背教」が始まっているということです。7つの教会に向けて書かれたメッセージの中には、ある者たちは頑張ってキリストの教えを守り続け、しかしある者たちは最初の信仰から離れていってしまったことが書いてあります。

背教の原因ははっきりと分かっています。それは人が聖霊に尋ね続けることを忘れ、自分の考えに頼るようになったからです。パウロは書簡の中でこう述べています。

「あなたがたがこんなにも早く、あなたがたをキリストの恵みの内へとお招きになったかたから離れて、違った福音に落ちていくことが、わたしには不思議でならない。（ガラテヤ人への手紙1：6）」

つまり、この7つの手紙は当時、徐々に教会の中で背教が広がっていたことを、私達に伝えてくれているのです。そしてそれは同時に、ヨハネがもしこのまま大切なことをわかりやすく書き記してしまえば、それは書き換えられ、あるいは失われてしまうということを暗に示しているのかかもしれません。もしそのことが理由でヨハネがこれから書き記すことを「難解」にしたとしたならば、私達はどのようにしてその内容を理解すればよいのでしょうか？

その答えがこの取扱説明書である7つの手紙が伝えてくれる第2のメッセージです。

この7つの手紙にはどの手紙にも、ある同じ文章が使われているのです。それは、「耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい」という言葉です。

背教が聖霊から離れてしまうことによって起こるのであれば、再び聖霊と交わることができるようになる者には理解の力が与えられると思いませんか？ その祝福と賜物は長い背教の後に回復という業を持って私達に与えられました。私達が、キリストに従うことを心から望み、その身を水よって清めたときに神様からの贈り物として与えられる「聖霊の賜物」こそが、その力です。

私達は自らを清め、学び、考え、祈り求めるときに、この賜物を通して聖霊から答えを受けることができます。そしてそれは、預言されていた通りに末日にもたらされたものなのです。

「その後わたしはわが靈を／すべての肉なる者に注ぐ。あなたがたのむすこ、娘は預言をし、あなたがたの老人たちは夢を見、あなたがたの若者たちは幻を見る。・・・すべて主の名を呼ぶ者は救われる。それは主が言われたように、シオンの山とエルサレムとに、のがれる者があるからである。その残った者のうちに、主のお召しになる者がある。」（ヨエル書2：28-32）

さらにヨハネはそれを強調するために、イエス様が地上におられた時に頻繁に使われた「耳のあるものは聞くがよい」という言葉をここで利用しました。ところがこの言葉にはヨハネなりの私達に向けたメッセージが書かれています。イエス様の使われた「耳のある者は聞くがよい」は英語で ears であり、耳という単語が複数形になっています。人には2つの耳があるからです。ところがヨハネはこれをもじって an ear、すなわち「一つの耳で」と書き直しています。もしこれが翻訳による間違いでなければそこには不思議な意味が込められています。

An ear、すなわち一つの耳でという言葉は全聖典の中で9回出てきます。そのうち8回は黙示録で、その中の7回は前述の通りすべて7つの教会にあてた手紙の中にあります。問題は残りの2つがどこにあるかです。一つは黙示録の13章、そしてもう一つはモルモン書の中にあります。

まずモルモン書から見てみましょう。一つの耳が出てくるのは第2ニーファイ書の28：30の聖句です。ここはニーファイがイザヤ書から引用し、神様が私達に福音をどのように教えてくださるのかを説明してくれている部分です。

「見よ、主なる神はこう言われる。『わたしはここにも少し、そこにも少しと、教えに教え、訓戒に訓戒を加えて、それを人の子らに与えよう。私の訓戒を聴き、私の勧めに耳(an ear)を貸す者は、知恵を得るので幸いである』」

この聖句は神様の御心を知るための3つの段階を表したもので、最初はキリストの光による漠然とした善惡の判断（ここにも少し、そこにも少し）、次にキリストにたどり着いたときの彼の教えである福音の理解（教えに教え）、最終的には聖霊による神様の御心の理解（訓戒に訓戒）で、そこにたどり着くためには「一つの耳」、すなわち心を一つに集中して聖霊のささやきを聞くことが重要であるとイザヤが教えていいるところです。これが聖霊の働きであることはその後に続く31節からも理解することができます。

「人に頼る者、すなわち肉を自分の腕とする者はのろわれる。すなわち、聖霊の力によって与えられる訓戒ではなく、人の訓戒に耳を傾ける者はのろわれる。」

もしヨハネが私達末日聖徒に自分の暗号を託すとしたら、彼はもちろん私達が聖霊の賜物を受けていることを知っていたでしょう。ニーファイが、書く者も、読む者も、両者が共に御霊に満たされていれば理解ができると説明したのはそういう意味です。

ですからこの7つの教会にあてた手紙の内容を「默示録の取り扱い説明書」として上記の2つの重要なメッセージを読み解くことができると、ここから先にヨハネが書き残した示現の内容がかなり理解しやすくなります。そして、もう一回第13章出てくる「一つの耳」にヨハネが私達に向けた重要なメッセージが隠れていることを知ることになるでしょう。

※もちろんこの7つのメッセージにはそれぞれ素晴らしい主に従う者たちへの約束が書かれていますので、普通にイエス・キリストからのメッセージとして読んでも当然理解することができます。この部分はそれほど難解ではありませんので、他の聖文と同じように読んでみてください。

【第4章】示現のはじまり

第4章はヨハネの默示録の中でも特に重要な位置を占める「起点」になります。実際にヨハネが見た示現の内容を知るだけであれば、默示録はここから始まっても良いのですが、末日聖徒が理解するためにはどうしても前述の7つの教会へあてた手紙が必要だったと知ればより理解が深まるはずです。

この章では最初の1節がとても重要になりますので注意して読んでください。

「その後、わたしが見ていると、見よ、開いた門が天にあった。そして、さきにラッパのような声でわたしに呼びかけるのを聞いた初めの声が、「ここに上ってきなさい。そうしたら、これから後に起るべきことを、見せてあげよう」と言った。」

第1章でも言われた「これから起ること」は、明らかに末日に向けて神様がご計画されていることであり、わたしたちが設定した「末日聖徒に向けて書かれた」という仮説を当てはめれば、ここから先は私達、末日聖徒の時代に起るべきこと、つまりそれを理解することに、私達に託された責務を知る鍵があると予想することができます。

さらに、これがこの後に続くヨハネの仕掛けた「難解さ」を紐解くための一つの鍵、あるいは「指針」となってくれます。別の言い方をすれば、「これから起こる部分」だけに集中して読めば、彼の意図した内容が理解できるということです。

それでは話を進めましょう。

2節からいきなり第4章の最後の部分まで「一体これは何?」というような文章が続きます。その表現はエゼキエル書の1:4-28にも出てくるものと非常に似通っていて、キリスト教世界の中ではずっと謎の一つとされていました。

でも本当は、この部分は特に難しくはありません。ヨハネが最初に見せられたもの、それは天のお父様のおられる場所です。少なくとも預言者の何人かは預言者として召されるときに、何らかの理由でこれと同じものを目にすることがあったようです。その場所には人間の想像を遥かに超える栄光があり、人間の知らない生物があり、人間の考えたこともない組織や律法があって、おそらくそれを目にしたものは、それをなんとか表現しようとしてかなり苦労したと思います。この地上に存在しない、誰も見たことのないものを書く必要があるわけですから、それはとても大変なことでしょう。

実はイザヤも同じものを見ています。それはイザヤ書の6章です。イザヤが預言者として召された時に、示現でこの同じ場所を目にしました。ですので、イザヤ書6章での表現もこの部分に酷似しています。

さらにリーハイも同じものを見ていると知っていますか? 第一ニーファイ書、第1章の8節です。他の預言者の記録と比べるとかなり短いので気が付きにくいのですが、それはリーハイの言葉をニーファイが聞伝えで書いているからです。ニーファイは自分自身で見たわけではないので、記憶の中から父の言葉を簡潔に書いたと思われますが、他の預言者の記録と対比すれば、その内容はほぼ同じものであることが分かります。さらにこの中でリーハイは、はっきりと「神が御座に着き」と説明していますので、ヨハネの黙示録の中で御座に座っておられる方が天のお父様であることが理解できます。

さて、それではなぜ、ヨハネは最初に天のお父様の御座を見せられたのでしょうか?

私達が仮説を立証しようとして黙示録を読むためには、少なからず頭を働かせる必要があります。神様は無駄なことを計画されることはありません。全ては必然的、そして論理的につながっています。ですからここで一番初めにヨハネが天のお父様の御座を見たことには大きな意味があるのです。それは次の5章の初めで説明します。

※4章の不思議な生き物や表現についてもっと知りたい方は、教義と聖約77章を参照してください。

【第5章】天父のみ手にある封じられた巻物とそれを開くことができる者

ヨハネはここであることに気が付きます。御座に座っている天のお父様の右の手の中に、不思議な巻物があるのを見ます。ここが他の預言者が同じものを見たときとは異なっている部分です。一般的に「右」というのは正しさや力、勝利などを意味します。英語で右をRightと呼び、同時に「正しい」という意味があることからもそのような考えが世にあることが伺えます。この神様

の右手にある巻物。それはすなわち「最初から神様の手の内にあった」ということを表します。イザヤは神様が私達のために最初から定められたご計画を持っておられ、それは決して変わることがないということを預言の中で示唆しています。

「万軍の主は誓って言われる、「わたしが思ったように必ず成り、わたしが定めたように必ず立つ。・・・ これは全地について定められた計画である。これは国々の上に伸ばされた手である。万軍の主が定められるとき、だれがそれを取り消すことができるのか。その手を伸ばされるとき、だれがそれを引きもどすことができるのか。」（イザヤ書 14：24, 26-27）

ではこの巻物に書かれているであろう神のご計画とは何でしょうか？

実は大変興味深いことに、默示録の中ではこの巻物が開かれたという記述はありません。ただ、その巻物を封じていた封印がすべて解かれたということは書かれています。ですからその巻物が開かれて、中に書いてあることが実行されると、默示録全体の流れから神のご計画が完成し、義人が救われるという勝利の計画だということは容易に想像することができます。（教義と聖約 77：6 参照）

ところがこの時、ヨハネはしばらく待っても、天のお父様の手からその巻物を取ってそれを開くことができる人物が出てこないことに気が付きます。それでヨハネは激しく泣きます。いくつか理由は考えられますが、例えば「このままでは義人は救われない」と思ったのか、あるいは「自分が信じて従ってきたイエス様でもだめなのか」と感じたのかもしれません。しかし、すぐにその思いはかき消されます。その場にいた長老の一人の声が聞こえ、次のように告げるのを聞きます。

「泣くな。見よ、ユダ族のしし、ダビデの若枝であるかたが、勝利を得たので、その巻物を開き七つの封印を解くことができる。（5 節）」

ダビデの若枝とはキリストを指す言葉です。イエス・キリストはユダ族で、ダビデの家系に生まれました。ダビデの父はエッサイです。ですからイザヤはイザヤ書 11 章でイエスキリストのことを「エッサイの株」と呼んでいます。イザヤはジョセフ・スマスのことをキリストから生える若枝と呼ぶためにキリストご自身をエッサイの株と呼びましたが、ヨハネの默示録の第 5 章の中ではキリストが主人公になるので、キリストのことをダビデの若枝と呼んでいます。

ヨハネが頭を上げると、そこには主イエス・キリストが立っているのですが、その様子を自分の慕う主としてではなく、神のご計画の中の最重要人物として表現し、さらに「ほふられたとみえる小羊」と表現しています。この巻物を受取れる者は完全に神のご計画に従うことのできる人物である必要があり、イエス・キリストこそは完全に神の御心に従い、すべての人間のために、その身を犠牲にして贖いの業をなし終えて神に従うことを証明されたその人であるという意味です。

さらにこの人に従い、世界中に遣わされる 12 人の僕たちを見て福音がこの地上に広められたのを見ます。それがこの部分なのですが、聖書には

「わたしはまた、御座と四つの生き物との間、長老たちの間に、ほふられたとみえる小羊が立っているのを見た。それに七つの角と七つの目とがあった。これらの目は、全世界につかわされた、神の七つの靈である。」

と書いてあり、これだけでは何のことと言っているのかはつきり理解することができません。しかし、ジョセフ・スミスが靈感訳で、ここは7ではなく、12であって、神の12人の僕のことであると訳してくれたおかげで私達には意味を理解することができるようになりました。リーハイもモルモン書の中で同様の物を見ているので参照して下さい（第一ニーファイ書1：10参照）。

さて、この第5章を読む人は時間の流れに混乱することでしょう。これがいつ起こった話なのか、どこの時代に焦点をあてればよいのかと思い悩むと思います。そこでここで早速第4章の1節で定めた「指針」である「これから起こること」を当てはめてみましょう。

これは天上会議のことではありません。なぜならキリストはこの時すでに「ほふられ、人々をあがなった」と記されているからです。十二使徒はすでに世界へ出て行き（たとえこの時点でヨハネ以外はすでに殉教していたとしても）福音は世界に伝え始められたという事実が書いてあります。実際、ヨハネはその中の一人というわけですから、その事実の後に起こるであろう「これから」のことを知ることができるというこの機会に高揚したと思われます。なおかつ、天父の前にはべり、神に仕える人々が口々にヨハネが仕える主イエス・キリストを「あなたこそがふさわしい」と言うのですから喜びに溢れ、期待も高まったと思います。

【第6章】7つの封印

第6章は黙示録の中でも最も謎めいた章と言えるでしょう。この中で巻物に付いている7つの封印が次々に解かれていくのですが、その一つ一つが解かれるときに不思議なことが起こります。その描写が一体何を意味しているのかがわからないために、キリスト教世界では黙示録が最も難解な書物として取り扱われているのです。

まず、「封印」について説明しておきます。ヨハネが封印として認識できるものですから、おそらくはヨハネの時代に一般的に用いられていた書類の封印方法のことでしょう。

ヨハネの時代というのはローマ帝国の支配下の時代ということです。この時代、書類はスクロールと呼ばれる巻物に書かれていました。現代のような紙はまだこの地域には存在しておらず、パピルスや大変高価である羊皮紙というものに文字を書いて残すのが一般的でした。教義と聖約7章でもヨハネは「羊皮紙に書いた」とあるので黙示録自体もそうだったのかもしれません。いずれにせよ、ローマ帝国の政治の中では時折、あるいは頻繁に、機密書類が政治目的の中で利用されていました。

重要な書類は、ある特定の人だけが見ることができるように、権限のかかる方法で封印して中が見れないようにするのですが、このときに用いられたのがワックス・シールと呼ばれる色の付いた「ろう」を火で溶かして書類の継ぎ目の上に落とし、その人の権限が刻印された指輪などで抑えて硬め、権限を明らかにする方法です。更に重要な書類の場合は同じ書類に複数の人がそれぞ



図2巻物に施されたワックス・シールの封印

れに印を使って封印することも珍しくありませんでした。今の時代で言うところの係長の印、課長の印、部長の印のような感じだと思ってもらってよいでしょう。



天のお父様の右の手からイエス・キリストに渡された巻物には、その封印が7つ付いていました。当然ですが、ろうで固まっていますので、一つずつ割って壊さなければ中の巻物を開くことができません。ちなみにこの巻物には、中にも外にも所狭しと文字が書かれていたそうで、大量の情報が書き記されていたことが分かります。

第6章の1節から8節までは第一から第四までの封印が解かれるときの描写になります。まずはこの封印自体の意味がわからないと一体何が起こっているのかがわかりませんよね。驚くべきことに末日聖徒だけにはそれがわかるようになっているのです。それはその巻物の封印の意味がはつきりと啓示によって主ご自身が説明されているからです。7つの封印の説明は教義と聖約77章の7節に書かれています（末日聖徒の皆さん、偶然でしょうか？）。

「問い合わせ、それを封じている七つの封印によって、わたしたちは何を理解すべきか。
答え、わたしたちは次のように理解すべきである。すなわち、最初の封印には最初の千年のことが載っており、また第二の封印には第二の千年のこと、というようにして第七に至る。」（教義と聖約77:7）

大変興味深いことですが、聖書の歴史と実際の人類の歴史（記録のあるもの）はほぼ一致しており、さらに旧約聖書の前半には登場人物の死亡年齢や子供が生まれたときの年齢などが細かく記されているので、アダムが歴史に登場してくるのがだいたい紀元前4000年あたりであると推定されています。すると私達が「末日」と呼んでいるこの現代は紀元2000年ですので、足し合わせるとちょうど6000年、そしてこの後に来ると言われている福音千年の1000年を足すと、教義と聖約の言うようにちょうど7000年となります。

これを逆に考えると、神の子供たちである人類の歴史を7000年間だと最初に決めて、最後の1000年間を特別な期間と定めていれば、当然のことながら6番目の1000年の終わりから7番目の1000年の始まりの部分がちょうど今にあたる「末日」と呼ばれる期間で、もし私達が設定した仮説を当てはめるのであれば、末日聖徒はその名の通り、「末日に働くイエス・キリストの教会の聖徒」ということになります。この教会の名前を決められたのは主ご自身です。

「わたしの教会は、終わりの時にこのように、すなわち末日聖徒イエス・キリスト教会と呼ばなければならぬ。」（教義と聖約115:4）

さらに、この時代を封印で表すならば、ちょうど第六と第七の間、あるいは第六の終わりと第七の初めということになります。実はその部分こそがヨハネの黙示録の中で最も長く（全体の72%、示現の部分だけなら84%）、そして細かく詳細に説明されている部分であり、それによってヨハネが最も伝えたかった部分であるということが分かります。そうなると最初に設定した仮説、「この黙示録は私達、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員に向けて書かれたものである」がまんざら当て外れなものでもないという気がしてくるのではないでしょうか。

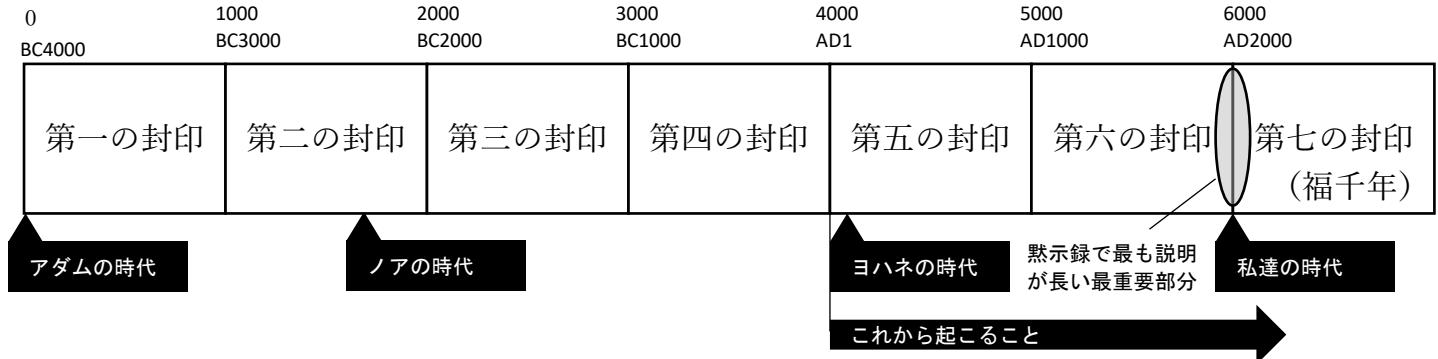


図3 封印と時代の比較

それでは話を戻しましょう。もし私達が「指針」である「これから起こること」だけに集中して黙示録を読むとすれば、第一の封印から第四の封印まではそれほど重要ではないことになります。主が封印を解かれるときに起こることですから、明らかにその時代に起こったことなのでしょうが、それはすでに過去のことなので歴史にしかすぎません。しかもこれはある意味検討のしようがないのです。

私達が持つノアの箱舟以前の記録というのはモーセが見た示現にかかっています（モーセ書1：40参照）。モーセが見た示現というのは神権と神の教会の歴史に関わるもので地球全体の歴史ではありません。またノアの時の大洪水で、かつて存在していたであろう古代の歴史もほぼ失われていますから、私達は第一から第四までの封印を解く時に起こる出来事を実際の地球の歴史と照らし合わせて検証することが、とてもむずかしくなるわけです。

しかし、ヨハネはそのことを知っていてもなおかつ、難解さと神秘性を持たせるためにあえて比喩的にこの部分で自分が見たことを簡潔に書いたのかもしれません。しかし、文章の長さと、同じ部分がこの後に二度と出てくることがないことからも、ここにさほど重要性がないことが分かります。

重要なのは第五の封印からです。ここから明らかに書式が変わることからもその違いを見て取ることができます。

現代に生きる私達に当てはまる時間は第六の封印の最後、あるいは第七の封印の最初の部分ですが、ヨハネが黙示録を受けた時、彼にとってそれは第五の封印の最初の時でした。すなわち福音であるキリストの言葉が地の面に広がり始める時、多くの人々が「神の言（ことば）」のゆえに、また、そのあかしを立てたために殺された（9節）」とあり、その人達の靈が主に向かって「いつまであなたは、さばくことをなさらず、また地に住む者に対して、わたしたちの血の報復をな

さらないのですか（10節）」と叫ぶところがあります。当然とも思える反応ですが、彼らに与えられた答えは不思議なものでした。

「もうしばらくの間休んでいるように（11節）」

つまり、もう少しすれば報復の時は来るが、まだその時ではないということです。ここで思い出していただきたいのは、イエス様が教えられた「毒麦のたとえ」の話（マタイによる福音書13章参照）です。ある農夫が持つ畠に麦の種を撒いたところ、夜中に敵が来て食べると死に至る毒麦の種が蒔かれてしまいます。しもべたちは驚き、主人に毒麦を抜き取るように嘆願します。すると主人はもう少し待つようにと言われます。理由は間違って良い麦も抜いてしまうかもしれないからでした。（教義と聖約86章参照）

この世に来て試しを受けるはずの神の子どもたちは、その与えられた時間を精一杯生きる機会が与えられます。もし、神様の都合で試しの時間が短くなれば、それは不公平としか言えなくなるでしょう。しかし、人は精一杯自分の心に思うことをこの世で行い、試しを受けることができます。そしてその時間は最初に決められたとおりに終わりが来て、最後の時を迎えることになります。そうすれば刈り入れが始まり、良い麦は束にして集められて倉におさめられ、毒麦は束にして捨てられて焼かれてしまうことになるのです。

第六の封印が解かれた時、大破壊が起こり、その結果として次のようなことが書いてあります。

「地の王たち、高官、千卒長、富める者、勇者、奴隸、自由人らはみな、ほら穴や山の岩かげに、身をかくした。そして、山と岩とにむかって言った、「さあ、われわれをおおって、御座にいますかたの御顔と小羊の怒りとから、かくまってくれ。御怒りの大いなる日が、すでにきたのだ。だれが、その前に立つことができようか」。」（15-17節）

この部分を読むと皆さんはおそらく「あれ？」と思われるのではないでしょうか？

そうです。ここに書いてあるのは最後の大破壊、すなわち第七の封印の話が書いてあるのです。みなさんが不思議に思われる理由、それは皆さんが末日聖徒であって、この第六の封印の時期に歴史上とても重要な「回復」という出来事があることを知っているからです。当然、ヨハネも知っていました。しかしそのまま書けば敵に書き換えられてしまいます。それほど重要な内容です。ですからヨハネは末日聖徒にとてもわかり易い暗号を残しました。聖典の中にこの部分の表現と全く同じ表現があるのです。それはイザヤ書でした。

「主が立って地を脅かされるとき、人々は岩のほら穴にはいり、また地の穴にはいって、主の恐るべきみ前と、その威光の輝きとを避ける。その日、人々は拝むためにみずから造った／しろがねの偶像と、こがねの偶像とを、もぐらもちと、こうもりに投げ与え、岩のほら穴や、がけの裂け目にはいり、主が立って地を脅かされるとき、主の恐るべきみ前と、その威光の輝きとを避ける。あなたがたは鼻から息の出入りする人に、たよることをやめよ、このような者はなんの価値があろうか。」（イザヤ書2:19-22）

2つの聖句が全く同じ情景を表しているのがわかりますか？

通常、イザヤ書などに書かれている予言は一つの予言がどの部分から始まっているのかを理解するのは困難だとされています。何章何節というのは後の人々が便宜上あとから付けたものであって、実際に預言者は一度にどこからどこまでを書いたのかを知ることはできないからです。しかし、イザヤ書2章ははっきりと出だしがわかるようになっています。それは1節。

「アモツの子イザヤがユダとエルサレムについて示された言葉。 終りの日に次のことが起る。主の家の山は、 もろもろの山のかしらとして堅く立ち、 もろもろの峰よりも高くそびえ、 すべて国はこれに流れてき、 多くの民は来て言う、「さあ、 われわれは主の山に登り、 ヤコブの神の家へ行こう。 彼はその道をわれわれに教えられる、 われわれはその道に歩もう」と。 律法はシオンから出、 主の言葉はエルサレムから出るからである。」 (イザヤ書 2:1-3)

この出来事によって起こる結果がイザヤ書 2 章の最後の部分になるということが分かれば、 上記の聖句からそのきっかけとなる第六の封印の出来事とは「回復」であることが末日聖徒には理解することができます。

【第 7 章】 神の印を押される者たち

第 7 章は第六の封印の続きですが、 末日聖徒にとって重要な回復の業の説明が描かれています。 ここまで時系列で進んで来たので、 第六の封印の説明の暗号化は少し時間の関係に惑わされますが、 あくまでも「回復の結果として起こること」と理解して読み進めるとわかりやすいと思います。 ここで説明される業とは「最後の時までに神の僕らの額に、 神の印を押してしまう (2-3 節から解説)」というものです。 毒麦のたとえでもわかるように、 最後にははつきりと良い麦と毒麦は分けられ、 選別されます。 黙示録の 13:16 ではサタンもおなじようにサタンにつく者の額にサタンの印を押すと書いてありますので、 最終的には良い麦なのか、 それとも毒麦なのかが判別されて、 悪いものは焼き払いにあうことになります。

この部分では大変興味深いことに、 この神の印を押してしまうまでの期間は、 世界の破壊である焼き払いを命じられている天使たちが、 しばらくの間留められることになっています。 そしてそれをとどめ、 最後に完成したかどうかを確認するのがヨハネに与えられた責任なのです。

「わたしたちの神の僕らの額に、 わたしたちが印をおしてしまうまでは、 地と海と木とをそこなってはならない。」 (3 節)

ヨハネはそう叫ぶ天使を見たと書いていますが、 その天使がヨハネ自身であることは最初に説明したとおり、 教義と聖約の 77 章で説明されています。 ヨハネが与えられた使命は「イスラエルの部族を集め、 万事を元通りにもどすこと」です。 わたしたち末日の聖徒はそのヨハネの業を助けるために、 200 年も前にモーセによってカートランド神殿で鍵を渡されたときから、 このイスラエルの集合の業に携わってきました。 今このときだけを見ると、 伝道の業が広がっていないように見えるかもしれません、 200 年前から比較するとその数は驚くほどに成長し、 一度も減少したことはありませんでした。 特に 1930 年あたりからの成長速度は急激で、 今や全世界に真実の福音が広がっています。 この業はさらに最後の時に向かって驚くべき進歩を遂げることでしょう。

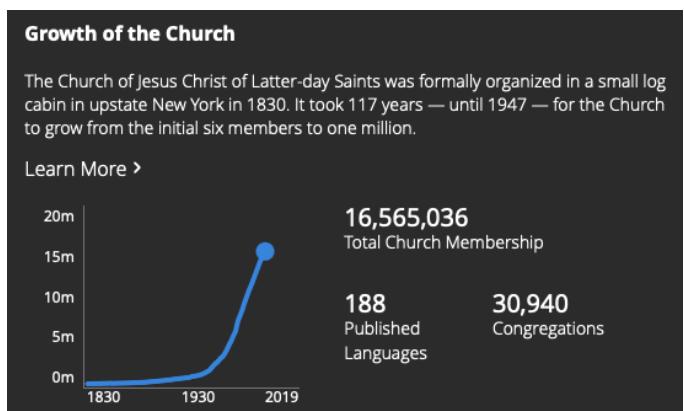


図4 教会員数の成長を表したグラフ

そしてその結果として起こることをヨハネは「聞いた」と書き記しています。見たのではなく、聞いたということは、まだこの時点では起こっていなかったということなのかもしれません。ここではイスラエルの部族の集合の様子が説明されています。

「わたしは印をおされた者の数を聞いたが、イスラエルの子らのすべての部族のうち、印をおされた者は十四万四千人であった。ユダの部族のうち、一万二千人が印をおされ、ルベンの部族のうち、一万二千人、ガドの部族のうち、一万二千人、アセルの部族のうち、一万二千人、ナフタリ部族のうち、一万二千人、マナセの部族のうち、一万二千人、シメオンの部族のうち、一万二千人、レビの部族のうち、一万二千人、イサカルの部族のうち、一万二千人、ゼブルンの部族のうち、一万二千人、ヨセフの部族のうち、一万二千人、ベニヤミンの部族のうち、一万二千人が印をおされた。」（4-8 節）

この中にはダンとエフライムが書かれていないとよく指摘がありますが、それはあまり重要ではないと思われます。教義と聖約にはちゃんと十二の部族と書かれているからです（教義と聖約 77：9-11 参照）。

さらに默示録の第 14 章では、今度は聞くのではなく、ヨハネはこの人々を直接見ることになります。ですからこの部分はただ聞いただけであって、それが実際に起こるのは先のこと（第 14 章あたり）だとも考えられます。

ではこの人々は一体誰なのでしょうか？この答えも現代の啓示で明らかにされています。教義と聖約 77 章の 11 節で説明されているように、この人々は神の業に召される大祭司のことです。更にこの人達は「長子の教会に来たいと望む全ての者を導く」とありますので特別な指導者たちなのでしょう。

この人達は一体どこから來るのでしょうか？今この地球上ではユダヤ人以外で（つまりユダ族として）、はっきりとイスラエルの十二部族の子孫であると断言できる人を、私達はまず見つけることができないでしよう。ニーファイが説明している通り、イスラエルは世界中に散り散りになってその所在がわからなくなってしまったからです（第一ニーファイ書 22：3-4 参照）。

逆にこれを考えていくと、ある不思議なことにたどり着きます。それは世界中の人々の中に全イスラエルの血が混ざってしまった可能性があるということです。わたしたちはよく「失われた十支族」と言って、戦いに負けて取り去られて帰ってこなくなったイスラエル王国（北王国）の人々の話をしますが、実際に失われたのは彼らだけではありません。エジプトに売られたヨセフを通してエジプトに移り住んだ、すべてのイスラエル人が 430 年後にカナンの地に帰ったわけではありません。長いイスラエルの歴史の中で様々な理由で、国を去った人々も沢山居たことでしょう。70 年間バビロンで過ごしたすべてのユダ王国の人々が帰ってきたわけでもありませんし、キリストの復活後ローマによってエルサレムが破壊された時、ユダヤの人々は世界中に散らされてしまい、国を持たない民となってしまいました。1948 年に建国された現代のイスラエルに、すべてのイスラエル人が戻ってきたのではないことは明白です。ではこの失われた人々を探し当てる方法はあるのでしょうか？

この方法こそわたしたち末日聖徒に与えられた祝福師の血統宣言と呼ばれるものです。これは神権の職である「祝福師」に与えられた特別な権限で、生涯に渡る約束と祝福を教會員に与えると同時に、その人がアブラハムの聖約の元に祝福を受けられる血統であることを宣言することができます。どの血統に選ばれるかの方法は大きく分けて二つです。

1) バプテスマの聖約によってイスラエルの家の支族のどれかに養子縁組される。

2) もともとその人の体の中に流れるイスラエルの血から一つの支族を選び出す。

いずれの方法であっても、最終的にその人にとっての血統を定めるのは聖霊の指示によります。この末日の教会の回復は預言と、神権の族長の系統の通りにエフライムからスタートする必要がありましたので、現時点では教会員の殆どはエフライムとその家族であるマナセ、あるいはヨセフに血統宣言されています。しかし、今やエフライム、マナセそしてヨセフから十分にそれぞれ1万2千人の大祭司を出すことができるような人数に広がりました。ですからここから先は、他の支族の名前が多く宣言されていくことでしょう。沢山の人がそれぞれの支族の宣言を受ける時、やがてそれぞれの支族から同じく1万2千人の大祭司を出せるほどとなり、そのときこそが、伝道の最終場面であって、イスラエルの集合の完成となります。これが理解できると、どの血統に宣言されるかが重要ではなく、世界中でより多くの部族の名前が呼ばれることによって、ヨハネに与えられた責任が完成されていくということが分かると思います。

14万4千人は救われる人の数ではありません。救われる人はさらに多くいます。9節からはそのことが書かれています。

「その後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、数えきれないほどの大ぜいの群衆が、白い衣を身にまとい、しゅろの枝を手に持って、御座と小羊との前に立ち・・・彼らは大きな患難をとおってきた人たちであって、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。」（9-14節）

では殆どの人が救われるのかというと、そうでもないようです。たしかに救われる人の数は数え切れないほど多いと書かれていますが、教義と聖約の76章の中では星の光栄に入る者の数はそれ以上というような表現も書かれています。

「しかし見よ、わたしたちは星の栄えの世界の栄光とそこに住む者と、彼らが天の大空の星のように、あるいは海辺の砂のように数限りないのを目にし、」（教義と聖約76:109）

天のお父様は正しい者には必ず勝利が得られると約束しておられます。第7章は諦めずに努力し続ければ、必ずそれが報われて、勝利を得られるというチャンスを無駄にすることが無いようにというヨハネからのメッセージとしても読み取ることができます。

【第8章】第七の封印と7つのラッパ

第8章では時間の流れが戻り、いよいよ第七の封印が解かれます。最後の封印が解かれるということは、同時にこの巻物がいつ開かれても良いという状態になったことを表します。この巻物が開かれることに8章以降のことが含まれるのか、それとも全てが完了した後に開かれて、その先のことが起こるのかは定かではありませんが、いずれにしてもこの時点でその準備が整います。

最後の封印が解かれた時、「半時間ばかり、天に静けさがあった。（1節）」とあります。ある意味何も起こらないように見えたということなのかもしれません。モルモン書の第三ニーファイ書でキリストの降誕直前、すなわち主の最初の降臨の直前に、人々は何も起こらないのでレーマン人サムエルの預言が成就しないのではないかと不安になったことが記録されています（第三ニーファイ書1:5-8参照）。今はちょうどその時なのかもしれません。実際には主の業が世界規模

で進んでいるのにも関わらず、自分たちの毎日の生活は相変わらず苦しく、この世は悩みばかりで、自分の努力が神の御業のお役に立っているのかすらわかりません。毎日毎日、同じことの繰り返しのように見えて、いつ主の約束が果たされるのかが全く見えてこない状況。ヨハネは天の静けさをそのような状況に例えて、わたしたちに気を引き締めて、これから起こるとんでもない奇跡の連続に耐えることができるよう注意をうながしているのかもしれません。もし、そうであるなら第七の封印はすでに解かれている可能性があります。

ヨハネはこの時に7人の御使いがそれぞれラッパを手にして立っているのを目に入れます。当時ラッパは遠くにいる人や大勢の群衆に合図を伝えるのに使われていました。大きな音の出る太鼓などもそのたぐいで、戦場や公共の場で人々に何かを知らせる合図を送る道具であったことを前提に8章からを読むと分かりやすいと思います。

まずラッパが吹かれる前に一つの出来事が起こります。ラッパを持つ7人の御使いたちとは別に、もうひとりの御使いが金の香炉を手に持って、天のお父様の御座の前にある金の祭壇の前に立ちます（3節）。この御使いには沢山の香が与えられていました。ヨハネは「この御使いはすべての聖徒の祈りに加えて神のみ前に煙を立ち上らせた」と書いています。このすべての聖徒というのは末日聖徒イエス・キリストの教会の会員だけではありません。アダムの時代からのすべての義人の祈りです。これを理解することはわたしたちにとって、とても重要です。わたしたちが末日聖徒として今存在することができるは、過去の沢山の義人たちがその行いと祈りを通して、この現代に至るまでバトンを渡し続けてくれたからです。

「このようにして、彼らは、この地でこの福音を信じる者が永遠の命を得られるように、彼らの祈りの中でこの地に祝福を残したのである。」（教義と聖約10：50）

すべての義人である聖徒の祈りが香の煙とともに神のみ座に届いた時、最後の恐ろしい焼き払いが始まります。その合図は「神にすべての聖徒の祈りを届ける」という役割を終えた金の香炉を持つ御使いが、その香炉に祭壇の火を満たして地に投げつけるところから始まります。すなわちこの瞬間がこの世の試しの期間の終わり、そして焼き払いの始まりの合図となって、7人の御使いは次々にラッパを吹き鳴らします。すると人が今までに見たことのないような災が次々に起ります。

きっとこの部分の災いの描写を読む人はそれを恐ろしく感じて、できることならその描写を理解し、現代に起こっている様々な事件と重ね合わせて末日の近いことを知ろうとするでしょう。しかし、それにはあまり意味がないように思われます。よく考えてみて下さい、これは最後の出来事であって、今から起ることであり、今までに起きたことではありません。たとえ、ここに書かれている事柄が何を意味するのかを理解できたとしても、それはすでに試しの時期をすぎた時であり、そこから悔い改めて準備し始めることはできないからです。それにこの事によって起る災は地上にいる全ての者を焼き滅ぼすほどの災いですから、過去にも現在にも比較できるものなど何もありません。

今を生きる私達の周りでも、数々の今までに見たことのないような恐ろしい出来事は日々起こっています。その一つ一つを取って、「これがヨハネの預言したことなのだろうか？」と不安に駆られることもあるかも知れません。しかし、イエス様が終わりの時のことについて語られた言葉を覚えておくと良いでしょう。

「見よ、選民のために、わたしあなたがたにこれらのこと語るのである。・・・あわてないように気をつけなさい。わたしあなたがたに告げたことはすべて、必ず起こるからである。しかし、まだ終わりではない。」（ヨセフ・スマス-マタイ1：23）

そして、実際にその「終わりの事」が起こる時、おそらくそれはとても短い時間で過ぎていきます。私がなぜこれが短い時間なのかと考えるのには理由があります。黙示録には7という数字が大きく分けて3回登場します。7つの封印、7つのラッパ、そして7つの災いの鉢です。7はユダヤ人にとって完成を表す数字で、教義と聖約が説明する通り、7つの封印は千年間というピリオドを表していました。黙示録を読むと、第7番目の封印を解く時に7つのラッパが現れ、その最後の7つのラッパが吹かれる時に、7つの災いの鉢が現れます。つまり、一つの封印の中での最初の部分で7つのラッパ、一つのラッパの中で7つの鉢ということになり、それぞれがさらに短いピリオドを表すことができるわけです。

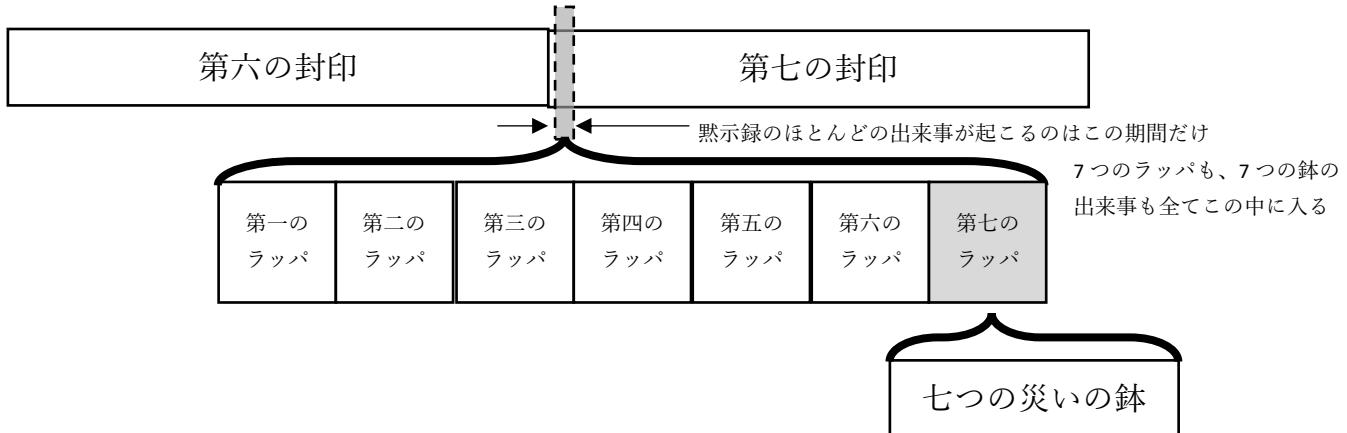


図5 事象と時間の関係

最後の焼き払いは突然始まり、徐々にスピードを上げて世界中に広まり、規模を拡大して最後に至ります。第18章には「滅び」がたった一日で来るとは思わなかつたという表現が何箇所かに出てきます。もちろん本当にすべてが24時間ではじまって終わるわけではないでしょうが、それほどあつという間という意味です。それが数年なのか、数ヶ月なのか、あるいは数日なのかはわかりませんが、高価な真珠のジョセフ・スマス-マタイにはこう書かれています。

「もしその期間が縮められないなら、救われる者は一人もいないであろう。しかし、選民のためには、聖約に従ってその期間が縮められるであろう。」（ジョセフ・スマス-マタイ 1:19）

黙示録だけを読むと、あまりの恐ろしさに、想像するだけで耐えられないと思うかもしれません。しかし、忘れないでください。これらの恐ろしいことを受けるのは悪人たちであり、悪人たちの焼き払いは、はるか昔から預言されていたことの成就にしかすぎません。義人たちは別の未来があります。ラッパは7つしか無いわけではなく、悪人のための7つのラッパもあれば、義人のための7つのラッパもあるのです。義人のための7つのラッパの話は教義と聖約の88章92節あたりから書いてあります。この2種類のラッパを時系列的に並べるとこのように見ることができます。

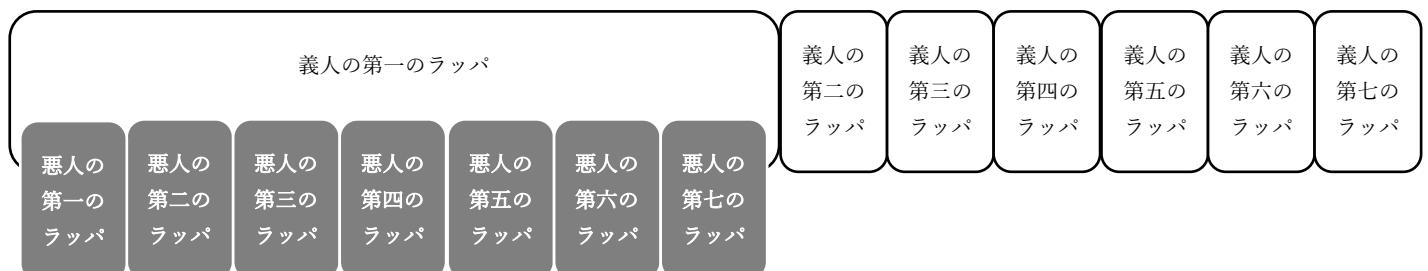


図6：義人と悪人の7つのラッパ

もとより、ヨハネは悪人に対して警告するために、このような恐ろしい表現をしたのだと思いますが、末日聖徒には別のメッセージが書かれていますので、しばらくは我慢して読み続けてください。もし、義人もこの激しい焼き払いに巻き込まれてしまうのではないか、と不安になるのであれば、それは心配ありません。この焼き払いは聖徒のやるべき業が全て完了した後に起こることだからです。

「さらにまた、この王国の福音は、すべての民への証として、全世界に宣べ伝えられるであろう。それから、終わり、すなわち悪人の滅亡が来るのである。」（ジョセフ・スミス-マタイ 1:31）

更に詳しく説明するなら、新約聖書の中での「毒麦のたとえ話」は毒麦が最初に集められ、その後に小麦が集められると書いてありますが、教義と聖約には逆の順番が書いてあることに気づくと、この理解の助けになります。

「それゆえ、作物が十分に熟すまで、小麦と毒麦をともに育つままにしておきなさい。その後、あなたがたはまず毒麦の中から小麦を集めなければならない。小麦を集めた後、見よ、見よ、毒麦は束にされ、畑は焼かれるばかりである。」（教義と聖約 86:7）

では具体的にどうやって激しい悪人の焼き払いから義しい者が守られるのか、それは第15章で説明します。ただ、わたしたちも義人になりきるまでには、まだまだ訓練を受け続ける必要があります。もし、神の訓練を諦めて自分の肉欲に従って生きる時、そこに待つものがこのヨハネの警告であることは知っておくべきことかもしれません。

【第9章】 ラッパがもたらす災い

ラッパはさらに続きます。第9章では第五から第六までのラッパが次々に吹かれます。その中で起こることの詳細ははっきりとはわかりません。現代に生きる人間で、それらを見たことのある者は誰一人存在しないからです。また過去にもなかつたような災いなので、他の事件などと比べたり、例えることもできません。ただ、必ず起こることだけはわかっています。

この章では少しあかりにくい言葉が出てきます。11節に出てくる「アバドン」と「アポルオン」です。これは「破壊するもの」あるいは「滅び」を表す言葉です。

12節にある「第一のわざわいは、過ぎ去った。見よ、この後、なお二つのわざわいが来る。」というは第8章の13節にある、残り3人のラッパというところからきています。

末日聖徒として特に注意して読むべきところは4節、「彼らは、地の草やすべての青草、またすべての木をそこなってはならないが、額に神の印がない人たちには害を加えてもよいと、言い渡された。」という部分です。これは末日聖徒は選ばれた人なので大丈夫という意味ではなく、

「天が共に働いている」という意味を理解すべきところです。これが理解できると、いかにわたしたちに託された責任が大きいのを実感することができると思います。

さて、ここまでこのところで第一から第四の封印の意味はわかりませんでした。そして第一から第六のラッパが巻き起こすであろう恐ろしい災の詳しい内容も結局はわかつていません。このまま行くと黙示録のほとんどの部分の内容を知らないまま終わってしまうのでは無いかと不安に思われるかもしれません。しかし、そう思う必要はないのだと預言者ジョセフ・スミスは黙示録の翻訳を終えた後で次のように宣言しています。

「私は次のことを広く宣言する。神が人間、獣あるいはどのような姿をしたものであれ、何かの示現をあたえてくださるときはいつでも、神はみずからその意味を説明し、明らかにする責任を負っておられるのである。・・・もし神がその問題について啓示も解き明かしも授けてくださっていないのであれば、私達は示現や形の意味を知らないからと言って非難されるのを恐れることは無いのである。（ジョセフ・スミスの教え英文 291 ページ）」

【第 10 章】 [重要] ヨハネの召し

第 10 章は中身をどういうふうに見るかで取り扱い方が変わってきます。最初にお見せした構成図では、私は第 10 章をとりあえず「現実の部分」としました。なんと呼べばよいか他に良い言葉が見つからないので、ここではそう呼ぶことにします。ここで書かれているのは、ヨハネがその召しを受け入れる話です。しかし、9 章からの続きの焼き払いの中で、すなわち世界の最後であるその時に、そこから召し（イスラエルの部族を集め、万事を元通りにする）を受けるというのは少しおかしな話です。

第 8 章からの流れを見ると「あれ？ 順番が・・・」と思われるかもしれません。これが神様から来る示現の不思議なところです。例えば私達がテレビや映画、あるいはインターネット上の動画などを見る時に、わたしたちの気持ちには関係なく、その画像は自然に流れています。もちろん動画に話しかけても何も起こりません。人が示現を見る時にもおそらく画像や動画を見るような感じで見ていくのかもしれません、そこには一つの大きな違いが存在します。それは示現を見ている者が、その流れに介入できるということです。

預言者が示現を見る時、大抵の場合、それを解説してくれる天使のエスコートが付きます。ニーファイ、ダニエル、エゼキエル、ゼカリヤ、ほとんどの預言者がそうです。黙示録の中でもヨハネは何人かのエスコートを受けています。教義と聖約の 76 章などでは主ご自身がジョセフ・スミスとシドニー・リグドンを示現の中でエスコートされています。黙示録の中で特徴的なのは、天使だけでなく示現の中の登場人物もエスコートをするというところです。これが理解できると黙示録の理解が格段に広がります。つまり示現の中の出来事が将来の出来事だとしても、その登場人物とリアルタイムで普通に語り合うことができるという不思議なことが起こるのです。

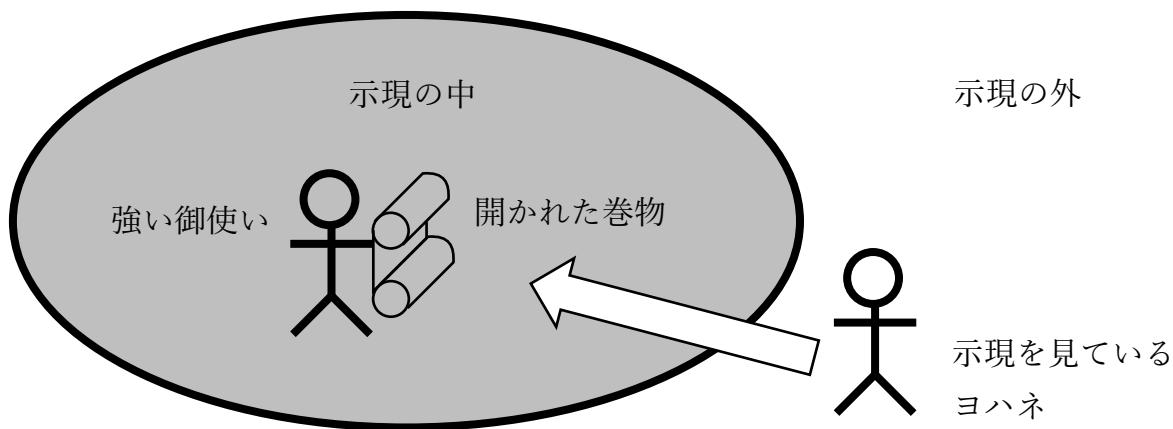
第 10 章で出てくる「強い御使い」はおそらく第 9 章からの続きなのでしょう。彼が 7 つの雷を使って叫んだ言葉（3 節）にはなにか特別な意味があったと思われます。そしてそれは神の奥義につながるものでした（7 節）。その言葉をヨハネは聞きましたが、書くことは止められました。

ところがこの強い御使いは、一見何に使うわけでもない、すでに開かれた（つまり封印されていない）小さな巻物を一つ手にしていました。

そこで示現とは別のことが起こります。天から声が聞こえてきて、ヨハネに告げるのです。

「さあ行って、海と地との上に立っている御使の手に開かれている巻物を、受け取りなさい」（8節）

よく考えてください。ヨハネは示現の中で末日に働く自分の姿をすでに見ています。ですから今示現を受けているヨハネはその示現の登場人物ではありません。登場人物のヨハネは示現の中に別にいます。今、示現を見ているヨハネに声が聞こえてあの天使から巻物を受け取れというのです。普通の映画や動画なら、画面に入っていって中の登場人物に話しかけたり、触れたりすることはできません。しかし、これは示現なのです。ヨハネは言われたとおりにその強い御使いのもとへ行き、「その小さな巻物を下さい（9節）」と言いました。すると、その示現の中の登場人物である御使いは「取って、それを食べてしまいなさい。あなたの腹には苦いが、口には蜜のようないい。（同9節）」といって手に持った巻物を渡してくれるのでした。



パトモス島に居た時、おそらくヨハネはけっこう年を取っていたと思われます。その後の消息は不明なので、そのときにはもう100歳近かったのかもしれません。この時にヨハネは示現の中で巻物を受け取って食べます。すると、口には甘く、腹には苦く感じられました。そしてまた声が聞こえます。

「あなたは、もう一度、多くの民族、国民、国語、王たちについて、預言せねばならない」（11節）

もしこれが示現の中の話なら、世の中はもうすでに焼き払いに入っています。ですからこれから預言をし始めたところで、すでに人々の試しの期間は終わっており、なんの役にも立たないでしょう。しかしヨハネはパトモス島に囚われていた時、教会員や世間の人々との交流を絶たれました。通常ならそのままその島で老衰で果てることになっていたでしょう。しかし、声は「もう一度預言しなさい」と言われたのです。この言葉は教義と聖約7章に書かれているものと一致します。

「そこで、わたし（ヨハネ）は主に申し上げた。「主よ、わたしが生き長らえて、人々をあなたののみもとに導くことができるよう、死を制する力をお与えください。」すると、主はわたしに言わされた。「まことに、まことに、あなたに言う、あなたがこれを望んでいるので、わたしが栄光のうちに来るときまであなたはこの世にとどまり、もろもろの国民、部族、国語の民、民族の前で預言するであろう。」」（教義と聖約7:2-3）

ヨハネが示現の中の巻物を食べた時、（その時の）彼の中にこの召しが入りました。それは神様の崇高なご計画を推進することができる素晴らしい尊い召し、おそらく彼の口には甘く感じたことでしょう。しかし、その責任は実際には多くの艱難を伴い、多くの人は彼の言葉に耳をかたむけないので彼の腹には苦く感じたのかもしれません。このことは教義と聖約第77章の14節に書いてあります。

とても面白く興味深いと思いませんか？示現の中で召しを受ける。自分の人生がその瞬間から今示現で見ているその最後の時まで続き、神のために働き続ける。ヨハネの気持ちは高揚したと思います。しかし、彼の気持ちは更に高揚することになります。それはこの示現を最後まで見届けたとき、そこには確かな神のために働く者たちの勝利があったからです。だからこそ、それを知らせるために、彼は黙示録を書き残したのです。

【第11章】エルサレムと2本のオリブの木

再び話が示現へと戻ります。第11章では最初にエスコートの天使から測りざおが渡されます。「測りざお」とは現代でいう「物差し」のことです。ちなみに「測りなわ」が「巻き尺」のことになります。測りざおを渡されたヨハネはそれで聖所と祭壇と礼拝している人を測りなさいと命じられます（1節）。はっきりと断言はできませんが、この場所がエルサレムを指している可能性が大きいにあります。それはその後に「この聖なる都は踏みにじられ（2節）」とあり、ジョセフ・スミス-マタイの12節では「エルサレムの滅亡について」とあり、教義と聖約の第77章の15節でのこの部分の説明に「エルサレム」という言葉が出てくるからです。

もしこれがエルサレムであれば、まだこの時、ヨハネはその大きさを測ることができました。それは普通の土地だったからです。預言者ゼカリヤは同じように別のエルサレムを測ろうとする人を示現で見ます。

「またわたしが目をあげて見ていると、見よ、ひとりの人が、測りなわを手に持っているので、「あなたはどこへ行くのですか」と尋ねると、その人はわたしに言った、「エルサレムを測つて、その広さと、長さを見ようとするのです」。すると見よ、わたしと語る天の使が出て行くと、またひとりの天の使が出てきて、これに会って、言った、「走つて行って、あの若い人に言いなさい、『エルサレムはその中に、人と家畜が多くなるので、城壁のない村里のように、人の住む所となるでしょう。主は仰せられます、わたしはその周囲で火の城壁となり、その中で栄光となる』と」。（ゼカリヤ書2:1-5）

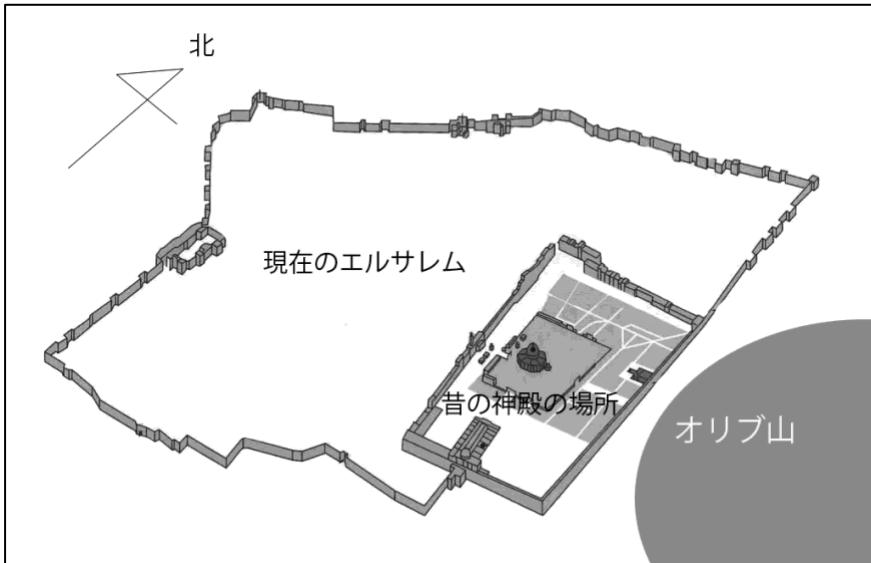


図7 エルサレムと神殿とオリブ山の位置

この中に登場する天使がヨハネなのかどうかは定かではありませんが、あきらかに後者の天使はエルサレムを測ることはできないと言っています。つまり、彼はシオンが完成したときの新エルサレムのことを話しているのです。ヨハネが今、測ろうとしているエルサレムはやがて破壊されてユダヤ人は逃げ場を失います。その時に神殿の目の前にあるオリブ山が二つに裂けて道ができます（教義と聖約45:48参照）。ユダヤ人はそこを通って逃げ、そして主とま見えることになります（教義と聖約45:51-53参照）。その後、末日の業

が完成するとエルサレムは新しい街となり、ミズーリ州インデペンデンスと共にシオンの首都となります。その時には敵がすべていなくなるので、もはや城壁もいらず、主が共に住まわれる所以街の境界線もなくなります。つまり、どこを測ればよいかわからなくなるのです。

ヨハネはさらにそこに二人の、預言をし、悪と戦う者たちを見ます。ヨハネはこの二人のことを「二本のオリブの木、また、二つの燭台である（4節）」と表現しています。オリブの木は平和の象徴であり、燭台は闇を照らす力です。ゼカリヤも全く同じものを見ています。ゼカリヤの第4章でそれは描かれていて、最後の14節で「これらはふたりの油そそがれた者で、全地の主のかたわらに立つ者です」と紹介されています。彼らと悪の軍勢の戦いは長く続きます。最後にこの二人が殺され、はりつけになり、三日半が過ぎた所で、二人は復活します。勝利に酔いしれていた悪の軍勢は恐怖におののき、大地震に見舞われます。その時にいよいよ最後のラッパが吹き鳴らされます。（教義と聖約77:15参照）

さて、この第11章はある意味で大変興味深い章とも言えます。このエルサレムで起こることは末日に起こることに間違いない、ヨハネも見ているはずなのですが、あまり詳しく書かれていないことにお気づきではないでしょうか？それはなぜか？私達が立てた仮説をもとに話すのであれば、エルサレムで起こることは末日聖徒とは直接関係のないユダヤ人について起こることだからです。イエスがキリストであることを否定し続けたユダヤ人は最後の最後にその真実を知ることになります。

ヨハネが末日聖徒に向けてメッセージを送るのであればこの部分が大幅にカットされている理由も理解できるのではないでしょうか？ただ、この二人の証人は末日聖徒ですからそのことだけは書き残されたのだと想像することができます。

※末日にエルサレムで起こることについてはゼカリヤ書とイザヤ書を中心に参照のこと

【第12章】 [最重要] 末日聖徒へ向けての解説

黙示録の中でおそらく、難解中の難解な部分がこの第12章と、それに続く第13章です。普通に読めば、ここまでなんとか読んでこれた人でも、突然話が繋がらなくなり、「一体自分は何を読

まさっているのだろう？」と思い悩んでしまうことでしょう。構成図でも説明したとおり、第12章と第13章は解説の部分です。問題はなぜここなのかということです。

ヘブライ文学にはある一つの大きな特徴があります。それが平行法と呼ばれるもので、イザヤ書などには顕著にそれが様々な場所に現れます。歌や詩で言うならば「サビ」あるいは「リフレイン」と呼ばれる繰り返しの部分がそれにあたり、同じ平行法でも様々な技法が使われます。そのヘブライ文学の平行法の中でも他の国ではあまり見られない独特の、不思議な平行法が「カイアズマ」と呼ばれるものです。その一例を見てみましょう。

- A わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、
 - B わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。
 - C 天が地よりも高いように、
 - B' わが道は、あなたがたの道よりも高く、
 - A' わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。
- (イザヤ書 55:9)

この聖句は人間と神様の思いの違いを説明したものですが、言葉が反転していることに気がつくはずです。AとA'の行はどちらも「思い」という言葉使われています。BとB'はどちらも「道」が使われています。そしていちばん重要な比較がCとして真ん中に配置され、この並びによってヘブライ人は人と神様の考えのはるかな違いを理解することができます。

このように同じような言葉の並びがひっくり返って逆順になるため、ギリシャ語の「X（カイ）」の形に似ているのでこの独特的な平行法はカイアズマと呼ばれるようになりました。

この表現は文章だけではなく、古代イスラエル人の考え方自体にも影響します。必ずしもそうとは言えないのですが、カイアズマは多くの場合、その中心に最も重要な部分が置かれます。

そこで考えてもらいたいのが默示録の全体構成です。最初にヨハネはこの默示録を書くのはヨハネだと自分の名前を明言して默示録を始め(A)、最後の22章でこれを書いたのはヨハネだと最後にもう一度自分の名前を書いて締めくくっています(A')。名前の次に出てくるのは自分が見た主の栄光です(B)。最後の22章の名前の前にあるのは主が住まわれるシオンの栄光です(B')。このように默示録全体がカイアズマになっているとしたら、ヨハネはどこに一番重要なメッセージを残すと思いますか？

默示録の真ん中は第12章と第13章です。事実、ここに末日聖徒にとって最も重要なメッセージが書かれています。

さらにこの部分はおそらく末日聖徒でなければ、まず理解することができない場所です。逆に言えば最初の仮説である「この默示録は私達、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員に向けて書かれたものである」と言うことを考えれば、この部分にこそ、ヨハネがわたしたちに残したかったメッセージの真髄が隠され、埋め込まれていることになります。

この第12章の内容は驚くべきものです。天上会議からエノクの作ったシオン、ノアの洪水によって隔離された聖なる土地。そしてその聖なる土地こそが回復の起点となる話。サタンがどれほど勢力を強め広げようとも聖徒はひるむことなく戦い続けること、そしてその忍耐。真理をかき乱そうとする邪悪なはかりごとに惑わされないようにする方法など、ありとあらゆる情報がこれら第12章と第13章には埋め込まれています。そしてそれは末日に与えられた聖典と、現代の預言者に与えられた啓示なしには理解できないようになっているのです。

黙示録自体に書かれている出来事は、簡単に言えば最後の焼き払いとシオンの設立、ただそれだけです。末日聖徒ではなくとも、読めばそれをなんとなく理解することはできます。しかし、末日に働く聖徒のために、そしてこの計画を成功させるために、神様が今まで、そしてこの先、どれほどのあわれみと深い御心をもって取り組んでおられるのかを、第12章を理解する時に私達は知ることになるでしょう。ですから第12章を読み始める時には、一旦今まで読んできた黙示録から気持ちを切り離して、まったく別の話として読み始めることをおすすめします。

「また、大いなるしるしが天に現れた。ひとりの女が太陽を着て、足の下に月を踏み、その頭に十二の星の冠をかぶっていた。

この女は子を宿しており、産みの苦しみと悩みとのために、泣き叫んでいた。

また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、大きな、赤い龍がいた。それに七つの頭と十の角とがあり、その頭に七つの冠をかぶっていた。」（1-3節）

ジョセフ・スミスのモルモン書の翻訳はわたしたちにとっての回復の原動力となったと同時に、彼自身にとって聖見者としての訓練となりました。彼がモルモン書の翻訳を終えた後に、完成された聖見者として、次に与えられた使命は聖書の翻訳でした。彼は原稿の存在しない聖書の一つ一つの書を、そのみたまの賜物によってオリジナルの原稿にたどり着き、それを靈感によって翻訳していったのです。しかし、翻訳ができてもオリジナルの原稿の内容そのものが理解しにくい時もありました。たとえば教義と聖約74章がその良い例で、翻訳した彼自身もその意図がはつきりとつかめないこともあります。そのときには躊躇することなく、天のお父様に祈りを通してたずねて、啓示を通してその意味を知るための答えを受けていたのです。

当然のことながら黙示録の翻訳はジョセフ・スミスにとっても大変難しく、様々なところで翻訳したものについて主にお伺いを立てることがあったようです。ちょうど12章のこの部分についてもジョセフは翻訳以外に説明を受けたようで、モルモン書の巻末に付隨されている靈感訳の黙示録第12章の最初にはこの3人の登場人物についての解説が次のように訳文の前に付け加えられています。

女（教会）、子（神の王国）、龍（サタン）

女は神の教会（あるいはキリストの教会）であり、その身に宿す子は神の王国です。このことを不思議に思う方もいらっしゃるかもしれません。なぜ神の王国が教会から生まれるのだろう、普通は逆ではないのだろうかと。ここで言う神の王国は、神の教会に属する教員が熱心に努め努力した結果として生まれてくる神の王国、すなわち「シオン」です。このことが理解できるとそれに続く文章が読みやすくなります。

その先を読む前に、まず1節から3節の表現について説明しておきます。女と赤い龍との表現には違いがあります。女は太陽を着て、月を踏み（靴のように履くと読むと理解しやすいです）、星をかぶっていました。太陽も、月も、星も神様が創られたものであって、自分では身につけることができないものであることがわかるでしょうか。それらを司る権威のあるお方によつて与えられない限り、それを身につけることなどできません。すなわちこの女、つまり教会は、神が認められたものであるという意味です。この聖句が参考になるかと思います。

「わたしの教会は、月のように明るく、太陽のように美しく、旗を立てた軍勢のように恐ろしいものとなる。」（教義と聖約5:14）

それに比べて龍の方は角を持ち、冠を被り、いくつもの頭を持っていました。いずれも権威に關係なく、自らその「偽物」の権威を表すために自分で準備できるもので、一つも実際に権威のあるお方から与えられたものではないことがわかるでしょう。

また、生まれてくる子のために、女である教会は非常な苦しみにあいます。シオンを生み出すことが並大抵のことではないことが理解できると思います。

4節からはその赤い龍が、天の星の三分の一をその尾で履き寄せて地に投げ落としたとあります。そして子が生まれたなら食い尽くそうと待ち構えていました。三分の一という表現でおわかれの方も多いと思いますが、地に投げ落としたとありますので、その前に居たところは天です。天上会議において、サタンであるルシフェルが自分の思いが叶えられないことを知り、天の子どもたちの三分の一を誘惑したためにこの地に落とされ、その全てが悪霊となりました。彼らの目的は一人ひとりの天の子どもたちに希望を諦めさせることと、最終的に起こるであろう神の王国すなわちシオンの建設を阻止することでした。

5節で女は子供を生みます。ところがすぐにその子供は天に引き上げられます。これが過去に起こったことであり、その子供がシオンを意味するのであれば、末日聖徒だけが知っているある人物の働きが思い出されるはずです。それはエノク。この地球上で過去に一度だけ、神の国シオンを築き上げるのに成功した人です。

エノクは悪しき人々に向かって悔い改めを叫び続け、ついにシオンを設立しました（モーセ書7章参照）。そしてそのシオンは天に取り上げられ（教義と聖約38:4参照）、やがて再びこの地上にもう一つのシオンができる時に降りてきて一つのシオンとなると言われています（教義と聖約45:11-12、モーセ書7:63参照）。

シオンが天に取り上げられると、女は窮地に立たされます。龍とその使いたちの追撃にあうのは目に見えているからです。ところが神様はここで不思議な手段を授け、女を逃します。

「女は荒野へ逃げて行った。そこには、彼女が千二百六十日のあいだ養われるよう、神の用意された場所があった。」（6節）

ジョセフ・スミスはこの千二百六十日を千二百六十年と訳し変えました。女が千二百六十年もの間サタンから逃げ続けることができたこの期間、すなわち「荒野」とは一体何でしょうか？教義と聖約の5:14や33:5などを読むと、このことが理解できるようになります。荒野には2つの意味があるようです。一つは時間を指すものであり、もう一つは場所を示す言葉です。教義と聖約から読み取ることのできる荒野が表す時間とは「大背教」のことです。ヨハネが示現を受けた後、人々は聖霊に尋ねることを忘れ、自らの知識だけに溺れるようになると、この地上から権威と真理が失われ、かつて見ないほどの背教が起ります。アモスが8:11-12で説明した神の言葉の飢饉です。この大背教はジョセフ・スミスの最初の示現やモルモン書の翻訳、神権の回復、教会の設立などによって徐々に終わりを迎えることになりますが、その兆しは回復の準備として、それよりもかなり早い時代に少しづつ始まっていました。

1500年代に始まったマーティン・ルターの宗教改革は有名ですが、実はそれ以前の1300年代にはイングランドのウィクリフやベーメンのフスらによってその先駆けとなる「先駆的運動」と呼ばれる動きが始まっていました。もしヨハネがこの默示録の示現を紀元100年あたりに受けているとすると、その1260年後がちょうどその時期にあたります。いずれにせよ、この期間、真の教会である女は逃げる必要がありました。默示録にはその間に女が逃げるために特別に準備された

「場所」が存在したと書いてあります。これは荒野が示す場所の意味です。その話の続きは13節からになります。

7節からは話が突然また変わります。これはユダヤ文学によく見られる、時間の流れの中で見られるテーマの解説です。12章そのものが默示録の示現という流れの中での解説の部分とすれば、7節はその12章の流れの中での解説の部分です。ここで話されているのは、天上会議の直後に天で起こったサタンと天の軍勢との戦いです。この戦いに負けたがゆえにサタンとその使いたちは地に落とされ、この地上で女を執拗に追いかけるようになりました。なぜならこの地上ではただこの女だけが、人を幸福に導く真理を持っていることを彼らは知っているからです。そのことが13節には書いてあり、サタンは教会（女）を追いかけ続けます。

ところが神様の不思議な計画によってこの女は守られます。女を守ったその「荒野」と呼ばれる場所はとても特殊な場所でした。ヨハネはその場所のことをこう呼びました。

「大きなわしの二つの翼」（14節）

彼自身が示現の通して見たのかもしれませんし、イザヤの書いた次の言葉から引用したのかもしれません。

「ああ、エチオピヤの川々のかなたなる／ぶんぶんと羽音のする国、」（イザヤ書18：1）

英語では「翼の影」と訳されるイザヤ書のこの部分は、翻訳者にとっては長年悩みの種だったと思われます。もともとイザヤ書は意味を理解しにくいため、翻訳作業自体が難しいのですが、この部分は鍵がなければ誰も理解することができません。イザヤ書18章はまさに、默示録同様、末日聖徒に向けて書かれている文章です。教会の聖典学者でもあるジョセフ・フィールディング・スミス大管長はかつて、この部分の翻訳には誤りがあると指摘されました。正しくは「翼の形をした」と訳されるべきであると説明されました（*The Signs of the Times* [1952], 51参照）。

なぜ、翼の形が重要なのでしょうか？スミス大管長はさらに自分が雑誌かなにかで見た南北アメリカ大陸の形がちょうど鷲が翼を広げた形をしているのに似ていると言及されました。アメリカ合衆国の国鳥が白頭鷲であることも偶然ではないかもしれません。イザヤ書18：1の最初に出てくる「ああ、」という言葉は英語の聖典では通常、「災い・悲しみ」と訳されますが、末日聖徒が使う英語のキング・ジェームズ版にはこの部分に重要なフットノートが入っていて、これはヘブライ語の「hoy」すなわち、感情を込めた挨拶を表す言葉であることが示されています。

つまりそれらを使ってこのイザヤ書18：1を訳し直すと「アフリカ、エチオピアの先にある大水を越えた、さらにその先にある鷲の翼の形の国とその民に挨拶を送る」となります。

イザヤはその特別な場所に住む、あるいは将来住むであろう人々の中に、末日に向けて主のために働く人々の姿を見たのではないでしょうか。



図8 鷲のつばさの形をした国

イザヤ書 18 章ではその挨拶のあとに、その国に住む特別な人々に対し、合図が見えたら（あるいは聞こえたら）迷わず行動を起こすように勧めています。そして天のお父様はそれを静かにじっと見ておられることも書き記しています。また、やがてその正しい民の努力によって贈り物がシオンで主に捧げられると預言しています。

ヨハネはさらにここでまた時間の流れから離れて、15 節から最後までの部分でこの土地の由来についてのある重要なことを書き残しています。

15 節からの話は簡単に読めば、「サタンが女を水で押し流そうとして大量の水を吐き出したが、地が口を開いてそれを飲み干した。そこで龍は怒って、女の残りの子らに戦いを挑むために出ていった。」とただそれだけで、特段何も気にする必要がないようにも思えます。ところがこの部分には驚くべき内容が隠されていて、それが理解できると、なぜ先程の「鷺の翼の形をした国」が重要であるのかがわかるようになります。

日本語で「水を川のように」と書かれている部分は、英語で「water as a flood」すなわち「洪水のように」と訳されています。いずれにせよ原文ではヨハネは地を埋め尽くすほどの大量の水と表現したのだと思われます。地を埋め尽くすほどの大量の水となると、おそらく末日聖徒でなくとも思い浮かぶことは唯一つ、それはノアの時の大洪水です。聖書の創世記はモーセが見せられた示現によって書かれていますので視点がモーセ自身になりますが、地球全体を眺めてみればそれは全人類を滅ぼすはずの洪水でした。ところがこの洪水でも神の教会（すなわち「女」）は生き残りました。それがノアの家族です。神権の相続者であり、族長であり、いわば当時の教会の大管長でもあったノアとその家族は生き残り、女である神の教会をこの地に残したのです。

彼らが生き残ることができた理由について、ヨハネは「しかし、地は女を助けた。すなわち、地はその口を開いて、龍が口から吐き出した川を飲みほした。（16 節）」と書いています。もちろん雨が上がり、地に乾いた陸が出てきたので、ノアの一家は生き残ることができたのですが、問題はなぜヨハネがこの話を 12 章に残したのかということです。一見、何の関係もないようにも思えますが、これが先程の流れの中での「鷺の翼の形をした国」についての解説をした部分であるのであれば、話は全く変わります。

地球はもともと一つの大陸でした。それがはっきりと分かってきたのはつい最近（1960 年以降）のことでのことで、最も最近の大陸（地球ができる以来、過去に何度も形成し直したとされている）をパンゲア大陸と地質学者たちは呼んでいます。パンゲアはギリシャ語で「全ての大陸」という意味で、このことが科学的に証明されるはるか前に、ジョセフ・スミスは啓示によってこのことを知らされています。

「エルサレムの地とシオンの地は、それぞれのところに戻り、陸地はそれが分けられる前の時代のようになる。」（教義と聖約 133 : 24）

では問題は「いつ地は分けられたのか？」ということです。もしヨハネが「鷺の翼の形をした国」の重要性を説明するためにこの部分を付け加えたとしたら、その国が分けられて準備されたのはノアの洪水の後になります。実は旧約聖書に、ある一つの大変興味深い記録が残されています。

「エベルにふたりの子が生れた。そのひとりの名をペレグといった。これは彼の代に地の民が分れたからである。」（創世記 10 : 25）（※英文では earth divided と書かれていて「地が別れた」の意）

ペレグというのノアの息子であるセムから数えて4代目に当たる子孫です。この時に地の民が別れたというはどういう意味でしょうか？ まず考えられるのはバベルの塔で起こった言語の搅乱です。これによって人はそれまで共にしていた土地を離れ、各言語ごとに集まって世界中に散っていくことになりました。このベベルの塔建設の発端になったのはニムロデという人で、エテル書にもその名前が出てきます（エテル書2:1参照）。この人はノアのひ孫に当たる人で、ペレグの2世代前になりますが、当時は結婚と出産数が現代とは異なりますし、また言語の乱れもエテル書の内容から時間をかけて起こったことがわかるので、この二人が同時代に存在していたとしてもおかしくはありませんし、バベル塔自体が当時の最大の建築事業でしたのでニムロデの生存中には完成せず、ペレグの時代に至ったということなのかもしれません。

ところがある聖書学者たちは、英文の表記からの解釈を元に、この部分を民が別れたのではなく、土地が別れたのではないかと推察する人たちがいます。しかし、もし大陸が動いて土地が分かれるとなると気が遠くなるような時間がかかるので、人一人の人生の中で起こるとはとても考えられません。もし仮にそのようなことが実際に短時間で起こったとすれば、その土地の移動の衝撃（マントルの流動やマグマの噴出、地割れ、土地の激しい隆起、熱、有毒ガスなど）で人類が滅亡するような大地震に見舞われることでしょう（後半の黙示録第16章での解説を参照）。しかもししこれが、たとえば「土地が別れたことに気がついた」という意味ならどうでしょう。人間が大陸の変動を目で見ることはほぼ不可能です。たとえば、広い幅の川の岸辺に立てば、それが川なのか海なのかすら理解できないと思います。望遠鏡もない時代、土地が遙かに離れあっていることを知ることのできる方法は位置の変化しない星などの観察を起点とした航海と、旅と、測量しか考えられません。もしペレグの生まれた時代に、ある測量の才能を持った人が大陸が別れていることを発見したのであれば、それはおそらく大ニュースであり、それを元に新しく生まれた子供にはおそらく「別れた」というような意味を持つであろうペレグという名をつけたのかもしれません。

つまり、これはこの時に気がついたわけですから、土地はそれ以前に分かれていたことになります。それ以前にあった出来事で、一つの大陸が短時間で分かれてしまうほどの地球規模の災害、それはつい4世代前に起こったノアの大洪水以外には考えられないでしょう。

もしノアの洪水で地殻にも変動が起り、水が引いた時に地球の姿が変わっていたとしたらそれはどんな意味があるのでしょうか？水が引いた後に出てきた「鷺の翼の形をした国」あるいは「鷺の翼の形をした土地」はノアの洪水後、約3800年もの間、人に見つかることはありませんでした。ただ一部の人たちを除いては。その一部の人達についてはその当事者であるニーファイ自身が主から言葉を賜っています。

「あなたがたは、私の命令を守るかぎり栄えて、約束の地に導かれるであろう。まことにそこは、あなたがたのためにわたしが備えた地であって、それはまことに、ほかのあらゆる地に勝ったえり抜きの地である。」（第一ニーファイ書2:20）

主が備えられたということは、目的を持って造られたということです。エノスはアメリカ大陸を「聖なる地」（エノス書1:10）と呼びました。末日になるまで誰にも見つからず、密かにメリキゼデク神権が引き継がれ、末日の日に真理を回復するために必要な書物が作られ、更には終わりの日に読み上げられるであろう封じられた書物が作られた、この特別に取っておかれた土地とは一体何なのでしょう。その鍵はジョセフ・スミスの言葉にあります。彼が将来建設されるシオンの場所についての啓示を受けた時、主からの啓示によってミズーリ州ジャクソン郡は「エデンの園があった場所」であると説明しました（George Q. Cannon, in Journal of Discourses, 11:336-37; Brigham Young, in Journal of Discourses, 8:195. 参照）。

つまり、アダムやエバが居た場所こそがアメリカ大陸であれば、エノクがシオンを作った場所もアメリカ大陸であり、そのエノクのシオンは再び地上に戻り、末日の聖徒たちが築き上げるシオンと一つとなるわけですから（モーセ書7:63参照）、つまり、この土地こそ、最初から目的を持つて準備された土地であって、密かに回復へ向けての業が準備され、そしてその回復の時が来たときに、初めて世界にその存在が知らされたということになります。その知らされた理由は女である神の教会が大背教から立ち上がるためでした。

「わたしはこの時代の人々の中では、ほかのだれにも、これと同じ証を受ける力を授けない。今はわたしの教会が荒れ野から立ち上がって出てくる始まりであり、」（教義と聖約5:14）

この神の教会が立ち上がる時、そこにはジョセフ・スミスをはじめ、初めからそのために働く備えられた神の僕たちがいました。彼らの働きによって教会はたったの6人から急成長し、世界中に広がっていったのです。当然、サタンは自分の策略が失敗に終わったことを知って怒りを発し、「女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行（17節）」きました。

この章を理解できる時、わたしたちは遙かいにしえの時代から、わたしたちが頑張り抜いて最後の最後にその栄光の冠を受け取ることができるよう、天のお父様が様々な備えをしてくださったことを心に思い描くことができるようになり、さらに他の聖典に書いてあることの意味がより深く理解できるようになると思います。

【第13章】[最も重要な] 末日聖徒の最後の試し、戦い勝利するための唯一の方法

第12章に続く解説の書が13章です。ただ、日本語の默示録だと若干位置がずれます。12章の18節にある、「そして海の砂の上に立った」は第13章の頭に付いてこれが13章の1節となります（英文参照）。第13章は海から獸が上ってくる様子から始まります。

この章では二つの獸が出てきます。この獸は単純に地球上にいる動物ではなく、禍々しく描かれているので怪物的な存在と言えます。さらに11節ではもう一匹の獸が出て来ます。インスティチュートや日曜学校のテキストなどでもこの部分には説明が添えてあり、最初の獸は「サタンの王国」、あるいは「サタンの教会」です。2節でサタンである龍がその力と位と権威を与えたということでも理解できますし、この教会を神の教会と比較してニーファイがこう書き残しています。

「天使はわたしに言った。「見よ、教会は二つしかない。一つは神の子羊の教会であり、もう一つは悪魔の教会である。したがって、神の子羊の教会に属していない者はだれでも、忌まわしい行いの母であるあの大きな教会に属するものである。」（第一ニーファイ書14:10）

そして2番目の獸は偽預言者です。ジョセフ・スミス-マタイでは少なくとも4箇所で、主は終わりの日になると偽預言者や偽キリストが出てくるので注意せよとおっしゃっています。「サタンの教会」や「偽預言者」と聞くとかなり宗教的な物を連想されると思いますが、そうとばかりは

かぎりません。先程のニーファイに語った天使の言葉を注意深く読むと、「神の教会に属さないものはだれでも」とありますので、宗教だけを指すのではなく、思想や文化、習慣や社会の観念などもすべて含まれます。そう考えると、この現代では一見、末日聖徒イエス・キリスト教会が信じる信念は現代社会から見ると異端だと思われるようになるかもしれません。実際、今、神の教会は取り囲まれています。第12章の終わりに赤い龍は聖徒に戦いをいどむように出て行つたと書いてあります。さらに第13章の7節では「そして彼は、聖徒に戦いをいどんでこれに勝つことを許され、さらに、すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。」と書かれています。サタンの教会は神の教会に勝ってしまうのでしょうか？ ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンが天の光栄の示現を見たときのことをこのように書き残しています。

「・・・神に背き、わたしたちの神とそのキリストの王国を取ろうとしたサタン、年を経た蛇、すなわち悪魔を、わたしたちは見たからである。彼は神の聖徒たちに戦いを挑み、彼らを取り囲む。」（教義と聖約76：28-29）

彼らの見た示現によると、残念ながらこの戦いで打ち負かされてしまった者たちもいました。最後まで真実の証を保ちきれずに聖靈を否定してしまったこの人達は、「滅びの子」と呼ばれます。滅びはすなわちサタンであり、その子となってしまったからです。一方、たとえその四面楚歌のような状況でも最後まで信仰を守り続けた人たちもいました。ヨハネはその人達のことをサタンに打ち負かされた人たちと比較して、このように書き記しています。

「耳のある者は、聞くがよい。とりこになるべき者は、とりこになっていく。つるぎで殺す者は、自らもつるぎで殺されねばならない。ここに、聖徒たちの忍耐と信仰とがある。」（9-10節）

一見、真実のように思えるものを振りかざして、サタンの教会と偽預言者とは猛威をふるいます。そして「また、小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隸にも、すべての人々に、その右の手あるいは額に刻印を押させ、この刻印のない者はみな、物を買うことも売ることもできないようにした。（16-17節）」ここで、ある対比が思い浮かぶことでしょう。第7章の2-3節では天使であるヨハネ自身が「生ける神の印」を持って、神の僕らの額にそれを押すまでは終わりを来させないと叫んだシーンです。サタンはこれを真似て、自分に従う者たちに自分の印を押していきます。

ヨハネはこの印は数字であったと説明しています。そしてさらに続けてこう書き記しています。

「ここに、知恵が必要である。思慮のある者は、獸の数字を解くがよい。その数字とは、人間をさすものである。そして、その数字は六百六十六である。」（18節）

ここで原点に戻って「この默示録は私達、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員に向けて書かれたものである」という見地からこの節を読み返してみましょう。先に、ヨハネは末日の聖徒たちがサタンの教会との戦いの中に居ることを説明し、忍耐と信仰が試されていることを説明しました。その後にサタンの教会と偽預言者との影響により、宗教のみならず世の中の人々はあたかも「真理」と思われているあらゆるものに惑わされて、それを受け入れないものは社会的に認められないという状況にまで聖徒を追いやります。ここでヨハネは問いかけています。「知恵が必要である」と。

知識は人が努力して得られるものですが、知恵は神様から賜るものです。神様が神の聖徒に何を最後まで求められるのかを考える時に、このパズルは解けていきます。

まだ、黙示録はこの先第 22 章まで続きますが、最後は神の王国が打ち立てられたところで終わります。この御業の完成のために、ヨハネは自分が見たものを 3 段階に分けて記録しています。この 3 段階は時間の流れであり、ピリオドとその長さを表します。

7 つの封印

7 つのラッパ

7 つの災いの鉢

構成図を見てもおわかりいただけるように 7 が 3 回来て、世界が完成し、神の王国、すなわち「最後まで聖徒が望んだもの」がやってきます。7 はユダヤ人にとっては特別な数字です。

人間は生まれたときから手に指が 10 本あるので、昔から 10 進数というものを使ってきました。もし人間に指が合わせて 6 本しかなければ 6 進数になっていたでしょう。この 10 進数というのは 1 から 10 までの数字を使うという意味で、その中でユダヤ人はこう考えました。「すべての数字はお互いに関係しあっている。2 を 3 倍すれば 6 になるし、3 を 3 倍すれば 9 になる。」と、こんな感じです。ところがたった一つだけ、他の数字とはどうしても干渉しない数字が出てきました。それが 7 です。そこで彼らは 7 のことを「完成された数字」と呼び、完成に向かっての工程を 7 で分ける風習ができました（例：天地創造の 7 日間や、ナアマンの 7 回の水による清め）。

ヨハネは聖徒が終わりの日に最後まで堪え忍べるように「7 が 3 回来れば勝利だ！」と黙示録を通して語りかけ、その一方でこう警告しています。「6 はあたかも真理のように見えるかもしれないが、その上がなく、決して完成しない」のだと。神の計画が 7 7 7 であるのに対し、サタンの計画は 6 6 6 であって、最後はそれに従ったものは見捨てられてしまうと警告していると読み取ることもできます。さらに言えば「その数字とは、人間をさすものである」とありますので、悪魔の印を押された人は 6 6 6 で満足する人ということになります。6 で満足する人は最後に捨てられてしまうのです。

このことはモルモン書の中からも読み取ることができます。二つの聖句を照らし合わせてみましょう。どちらもアルマ書です。

「このことから、主の道を曲げる者の末路が分かる。また、悪魔は終わりの日には自分の子らを助けようとせず、速やかに地獄に引きずり込むということも、わたしたちに分かるのである。」
(アルマ書 30:60)

「おまえたちの見るとおり、これは神のまことの信仰である。まことに、おまえたちの見るとおり、我々が神と自分の信仰と宗教に忠実であるかぎり、神は我々を支え、保ち、守ってください。また、我々が戒めに背いて自分の信仰を否定するようなことがなければ、主は我々が滅ぼされるのを決してそのままにしておかれない。」(アルマ書 44:4)

末日の最終段階で、聖徒はものすごい情報の嵐の試しにあいます。どの様にしっかりと福音にしがみつき、最後まで自分の努めを行えるようにするのか。正しい情報が不可欠です。どこからその情報を手にいれますか？「聖霊の賜物」が与えられているのは末日聖徒だけという事実を絶対に忘れないでください。

【第14章】世界の片隅で行われる勝利の始まり

ここで話がやっと本来の流れに戻ります。第七のラッパが吹かれることによって起こる災いが猛威をふるっている間に、世界の片隅では誰にも知られることのない不思議な出来事が起こります。ヨハネは第7章で先に話を聞いていたあの14万4千人の大祭司たちが、今度は主イエス・キリストとま見える場面を見ました。この人達はイザヤも預言した（イザヤ書42:10参照）新しい歌を歌って主を賛美します。

一体何が起きているのでしょうか？　ヨハネは続けてある説明をします。それは6節で、末日聖徒にとては黙示録の中でも特に馴染みの深い聖句です。

「わたしは、もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて、大声で言った、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め」。」（6-7節）

この聖句を聞けばほとんどの末日聖徒が、世界中の神殿の一番高い塔の上に輝きを放つてラッパを持って立つ、金色のモロナイ像を思い浮かべるに違いありません。しかし、この時点でモロナイが出てくると世の中の流れの順番がおかしくなります。この部分は最後の焼き払いの部分であり、モロナイが真実の福音を携えてくるのはそれよりずっと前の回復の幕開けのときのはずです。しかし、もし、これが先に書かれていた14万4千人に関連していることであれば、この天使の働きがあったからこそ、その働きの業の最終段階として14万4千人が聖徒を代表して主と会っているのだとも読むことができます。しかも、モロナイは末日において、すでに何度もジョセフ・スミスを訪れています（教会歴史参照）。

一体、彼らはその場所で主と何をしているのでしょうか？　それに関連すると思われるヒントがダニエルの預言に隠されています。もし、ダニエルとヨハネが見ているものが同じであるのであれば、それはおそらくアダムオンダイアーマンにおける神権の鍵の返還です。

「わたしが見ていると、もろもろのみ座が設けられて、日の老いたる者が座しておられた。その衣は雪のように白く、頭の毛は混じりものない羊の毛のようであった。そのみ座は火の炎であり、その車輪は燃える火であった。彼の前から、ひと筋の火の流れが出てきた。彼に仕える者は千々、彼の前にはべる者は万々、審判を行う者はその席に着き、かずかずの書き物が開かれた。

わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、見よ、人の子のような者が、天の雲に乗ってきて、日の老いたる者のもとに来ると、その前に導かれた。彼に主権と光栄と国とを賜い、諸民、諸族、諸国語の者を彼に仕えさせた。その主権は永遠の主権であって、なくなることがなく、その国は滅びることがない。」（ダニエル書7:9-10, 12-14）

ダニエルはヨハネが第13章で説明したのと同じように、終わりの日にサタンが世界中で猛威を振るう姿を見ました（ダニエル7:2-8参照）。しかし同時に、そのさなかに、小さなグループの人々の集まりを見ます。そこには日の老いたる者がいました。地球上に居た人間の中で最も歳をとっている人、すなわちアダムです。アダムは神権における地球上の管理人であり、わたしたち人類の族長です。ダニエルには彼の前にその神権（火の流れ）を受け継いだ人が千々、万々居て何かを待っている様子が見えました。しばらくするとそこに人の子のような者、すなわち主が来

られます。人々は彼から一時的にこの世で神のみ業を進めるためにお借りしていた主権の鍵（すなわち神権の鍵）をその持ち主である主イエス・キリストにお返しします。

アダムオンダイアーマンという言葉の意味は「アダムが住んだ神の地」という意味です。最後に起こるこの場所での出来事についてジョセフ・スミスは「権能を与えられたすべての者はこの場所に集まって、族長アダムにその責務に関する報告をする。その後、キリストが来られて、それらの鍵の返還を受けて自らが地上を統治しシオンとするための最終準備をされるのである」と説明しました。（ジョセフ・スミスの教え（英文）157）

ヨそれからハネは第2、第3の天使が、サタンの王国の崩壊を宣言するのを耳にします（8-12節）。そのあとヨハネは二人の鋭い鎌を持つ御使いと、二人のその御使いたちに命令を送る別の御使いたちを目にします（14-20節）。最初の御使いの頭には金の冠があり、白い雲に座していました。そして聖所から出てきた別の御使いの命によって、地の（熟した：英文）ものが刈り取られます。

そして次に同じように鋭い鎌を持つものが、聖所ではなく、祭壇から出てきた別の御使いに命じられて地の熟した「ぶどう」を刈り取るように命じられます。そして刈り取られた実は「神の激しい怒りの大きな酒ぶね」に投げ込まれます。その酒ぶねは都の外で踏まれ、そこから血が広がっていきます。

この二つの刈り入れは大変象徴的な対比です。毒麦の話を思い出すと分かりやすいでしょう。小さな芽のときには見分けがつかなかった麦と毒麦も今や成長し、はっきりとその見分けがつくようになりました。それで主は命じられて、最初に良い麦を刈り集められます。それが終わると、その後に残っているものは毒麦だけです。そして、ついにその刈り取りが始まります。ヨハネはここでどうしても、「毒麦」ではなく「ぶどう」という言葉を使う必要がありました。それはアダムオンダイアーマンで神権の鍵の返還を受け、主権を元に戻された主が次に行うことは悪の撲滅であり、そして予言通りにユダヤ人にその姿を表すことでした。そのどちらにも共通する預言が、イザヤのぶどうを怒りの酒ぶねで踏むという預言です。

「「このエドムから来る者、深紅の衣を着て、ボズラから来る者はだれか。その装いは、はなやかに、大いなる力をもって進み来る者はだれか」。「義をもって語り、救を施す力あるわたしがそれだ」。

「何ゆえあなたの装いは赤く、あなたの衣は酒ぶねを踏む者のように赤いのか」。

「わたしはひとりで酒ぶねを踏んだ。もろもろの民のなかに、わたしと事を共にする者はなかった。わたしは怒りによって彼らを踏み、憤りによって彼らを踏みにじったので、彼らの血がわが衣にふりかかり、わが装いをことごとく汚した。

報復の日がわが心のうちにあり、わがあがないの年が来たからである。

わたしは見たけれども、助ける者はなく、怪しんだけれども、ささえる者はなかった。それゆえ、わがかいながわたしを勝たせ、わが憤りがわたしをささえた。

わたしは怒りによって、もろもろの民を踏みにじり、憤りによって彼らを酔わせ、彼らの血を、地に流れさせた」。（イザヤ書63：1-6）

この聖句にはイザヤが得意とする二つの意味の当てはめがあります。一つはイエス様がわたしたちのために行ってくださった贖いの業です。「わたしは一人で酒ぶねを踏んだ」というのはゲッセマネの園での苦しみを表します。教義と聖約19章で、主ご自身が説明されたように、あらゆる毛穴から血を流すほどの苦しみ、すべての人を救うためのこの御業は、誰の手も借りることができませんでした。天のお父様でさえ手を出さずに、その苦しみを最後まで見守られました。主は

わたしたちすべての人間のためにその全身を赤く染めて、たったお一人でその業を成し遂げられたのです。

もう一つの意味は最初の「エドムから来る」というところが鍵になります。イザヤの住んでいたユダ王国にとってエドムは敵国であり、また真実の神を信じない悪の象徴でした。ボズラはエドムの当時の首都です。その服を真っ赤な血に染めて敵国からやって来るお方は、その敵地で悪と戦い、すべての悪を踏みつけて、あたかもぶどうを酒ぶねで踏み潰すときに、その赤い汁が跳ね返り作業者を真っ赤に染めるように、悪人の返り血を浴びて主の衣は赤く染まりました。黙示録の中で踏みつけられた悪人の血が流れ出て地に流れていったのは、焼き払いによってこの世の悪人が地上から絶たれていく様子を表しています。

【第15章】七つの災いの鉢

ヨハネはさらに別の七人の御使いが、七つの災いが満ちた鉢を手にして待ち構えているのを見ます。その時、ヨハネはそれとは違う別の物も見ていました。それはガラスでできた海のようでした。教義と聖約77章の最初でジョセフ・スミスは第4章に出てきた「ガラスの海」について質問しています。与えられた答えは「聖められた状態の地球」ということでした。ということは、ここではすでに地球の聖めが始まっているようです。そしてそのすぐそばに、沢山の人が集まっているのを見ます。ヨハネはこの人たちのことを第13章の最後にあった獣の数字にかけて、このように説明しています。

「またわたしは、火のまじったガラスの海のようなものを見た。そして、このガラスの海のそばに、獣とその像とその名の数字とにうち勝った人々が、神の立琴を手にして立っているのを見た。」（2節）

666という虚構の真実に騙されずに最後まで頑張り続け、完成にたどり着いた人たちの姿を、聖められ始めた地球と隣合させでヨハネは書き残しています。このあとに起こるさらに恐ろしい災いもこの人々を傷つけることはできません。第14章の13節で「またわたしは、天からの声がこう言うのを聞いた、「書きしるせ、『今から後、主にあって死ぬ死人はさいわいである』」。御靈も言う、「しかし、彼らはその労苦を解かれて休み、そのわざは彼らについていく」。」と書いてあり、その業が彼らについていくというのは、その人々の行いが認められ、もはやサタン消え行く世では罪を犯すことができないので、ほぼ裁きが良い方に確定したことを表します。また、人は変貌なしに神の栄光をまともに受けることはできません。不完全な肉体では耐えることができないからです。ですから、前述の14万4千人はもとより、すでに神の栄光を受けて聖められ始めた地球に立つ人々は、その身が変えられていて、この後に続く破壊的な災いすらも、この人達に影響することはないと考えられます。教義と聖約にもそのことが書かれています。

「そして、生きて地上にいる聖徒たちは、身を変えられて、主に会うために引き上げられる。」（教義と聖約88:96）

ヨハネの黙示録を読む時に、その内容の恐ろしさから、どうやって義人が助かることができるのかと多くの人が心配すると思いますが、これがその答えです。世界が変わる時、義人はその身が変えられて、悪人を滅ぼす災いの力もまったくおよばなくなります。ニーファイが彼の兄たちに向かって説明している通りです。

「すべての人の子らに神の満ちみちる激しい怒りが注がれる日が、速やかに来る。神は、悪人が義人を滅ぼすのを許されないからである。そのため神は、満ちみちる激しい怒りを下し、義人を守るために火をもって敵を滅ぼすことになっても、御自分の力によって義人を守られる。したがって、義人は恐れるには及ばない。たとえ火によってでも、彼らは救われるであろう。」預言者はそのように言っています。」（第一ニーファイ書 22：16-17）

「聖なる場所に立ちなさい」という言葉は同時に「あなたが立つ場所が聖なる場所になるようにしなさい」という意味なのかもしれません。

【第 16 章】正しくて恐ろしいさばき

主が悪を罪の酒ぶねで踏みつけ断罪された人々が、7つの災いの鉢に満たされた神の怒りがこぼたれることによって、次々に焼き払いにあって滅びていく様子が描かれています。その様子はとても残酷で、まるで慈悲の無いようにも思えますが、すでに神は彼らに対してとても長い時間、非常な慈悲を通して憐れみ、最後の最後まで悔い改めの機会を与え続けてこられました。しかし、今やその期限は終わりを迎え、もはや悪人に対して警告され続けてきたことが実行を迎えるときが来てしまいました。ヨハネはこのことに関して次のような言葉を聞きます。

「それから、水をつかさどる御使がこう言うのを、聞いた、「今いまし、昔いませる聖なる者よ。このようにお定めになったあなたは、正しいかたであります。聖徒と預言者との血を流した者たちに、血をお飲ませになりましたが、それは当然のことであります」。わたしはまた祭壇がこう言うのを聞いた、「全能者にして主なる神よ。しかし、あなたのさばきは真実で、かつ正しいさばきであります」」（5-7 節）

次々に起こる災はヨハネの書き方から読めば、一つずつ順番に起こるようにも見えますが、一つ一つの災いにはそれぞれその災の完成にかかる時間が異なるので、同時に並行して行われていることも考えられます。その中でも順番的にはもっと早い段階で起こるであろうと思われるのが第六の鉢によって起こるハルマゲドンの戦いです。エルサレムから少し離れたところにある、小さなメギドと呼ばれる場所の平野（ゼカリヤ書 12：11 参照）で始まる戦争は世界を巻き込む大きな戦争になります。第六番目の鉢はその終結のタイミングを示唆しているのかもしれません。

第七の鉢には大変興味深いことが書かれています。わたしは第 12 章の説明の部分で、もし大陸の分裂が人の人生の中の短期間で見ることができるほどのスピードで起こったとするならば、それは人類を滅ぼすような大地震になると説明しましたが、それはこれが逆の、地が再び一つになる時に起こることを默示録から知っていたからです。

「すると、いなざまと、もろもろの声と、雷鳴とが起り、また激しい地震があった。それは人間が地上にあらわれて以来、かつてなかつたようなもので、それほどに激しい地震であった。大いなる都は三つに裂かれ、諸国民の町々は倒れた。神は大いなるバビロンを思い起し、これに神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられた。島々はみな逃げ去り、山々は見えなくなつた。」（18-20 節）

人類が経験したことがない地震が起り、島も山も姿を消すとは一体どういうことでしょう。教義と聖約は更に説明を加えてくれています。

「それは大水のとどろきのような、また激しい雷鳴のような声であり、山々は崩れるであろう。そしてもうもろの谷は見えなくなる。彼が大いなる深みに命じると、それは北の地方へ退き、島々が一つの地となる。エルサレムの地とシオンの地は、それぞれのところに戻り、陸地はそれが分けられる前の時代のようになる。」（教義と聖約 133：22-24）

これによって地球の大陸は集まって一つの大陸となり、神の国シオンとなる準備が整います。

【第 17 章】 サタンとその王国の説明

第 17 章から第 20 章にかけては、集中的にサタンとその王国の最後が説明されています。ヨハネにとってこの部分を詳しく説明することはとても重要だったと思われます。それは自分の時代の人々がこんなにも早く聖霊に尋ねることを忘れ、人間の考えに陥っていくのをその目で見、その耳で聞いたからです。おそらくヨハネは人間の弱さ故に、どの時代においてもそれは起こってしまうことを悟ったのでしょう。彼が末日の聖徒に向けて書いているのだとすれば、末日にはサタンが最後のあがきとして、それまでになかったほどに強く聖徒たちに攻撃を仕掛けてくるのは目に見えています。だからこそ、末日の聖徒たちに向けて詳しく、サタンとその王国の最後を説明しておくことはとても重要だったと思われます。

黙示録全体で「サタン」という言葉が出てくるのは全部で 7 回、「悪魔」という言葉が出てくるのは 6 回です（日本語）。第 17 章から第 20 章にかけては、第 17 章から第 19 章に「サタン」は 0 回、「悪魔」は 1 回で、第 20 章にそれぞれ 2 回ずつ出でています。先程、集中的に説明されていると言った割にはその数が少ないと思いませんか？ そこで最初の話を思い出していただきたいのですが、ヨハネは予め、悪の勢力にとって都合の悪いことは書き換えられ、抜き取られることを知っていました。ですから末日のわたしたちに真実を届けるためにはどうしても言葉を暗号化する必要があったのです。

高価な真珠にあるモーセ書を思い出してください。もともと、モーセ書というのはジョセフ・スマスが始めた旧約聖書の創世記の翻訳の最初の部分です。不思議なことにジョセフ・スマスは創世記を第 1 章から訳さずに突然、現在のモーセ書第 1 章から訳し始めたのです。それは彼がその時にはすでに「完成した聖見者」であって、モーセが書いたオリジナルを見ることができたからでした。実はモーセが書いた創世記には第 1 章の前にもう一つの章が存在していて、それがモーセ書第 1 章になったのです（モーセ書第 2 章と創世記第 1 章の類似性を比較参照のこと）。モーセ書第 1 章が創世記から失われてしまった最大の理由は、そこに「サタン」という言葉でサタンのことが詳しく書かれていたからでした。

もし、ヨハネが「サタン」や「悪魔」という単語を多用して、具体的に詳しく書いて残せば、それは間違いなくわたしたちの手に届く前に消えてしまっていたでしょう。皆さんの中には「それでもジョセフ・スマスが翻訳して元に戻せるので大丈夫なのでは？」と思われる方もおられるかもしれませんね。実は黙示録とイザヤ書だけはそういうわけにはいかなかつたのです。黙示録もイザヤ書も、人類に与えられた神の約束が書いてあります。これは人類に最初から与えられている必要がありました。もし、モルモン書やモーセ書のように後から回復の業によつてもたらされ

ると、たとえそれが真実であったとしても、世の中の人々は「それは末日聖徒が勝手に後から作ったものだから」と言って決して受け入れることは無いでしょう。しかし、黙示録とイザヤ書は最初から彼らの手の内にあり、神様のご計画が最初から示されていたことを証明する必要があったのです。

わたしは終りの事を初めから告げ、まだなされない事を昔から告げて言う、『わたしの計りごとは必ず成り、わが目的をことごとくなし遂げる』と。（イザヤ 46：10）

そのためにこの二つの書だけは最初から世に出されており、聖書をサポートする目的で世に出てきたモルモン書や教義と聖約でさえ、この二つの書について聖徒たちに読むように勧めているのです。

「見よ、この記録を書き記しているのは、ユダヤ人から伝わる記録をあなた方に信じさせるためである。また、あなた方はそれを信じるならば、これも信じるであろう。そして、もしこれを信じるならば、あなたがたの先祖について知り、また先祖の中で神の力によって行われた驚くべき業についても知るようになるであろう。」（モルモン書 7：9）

以上のことを見て、ここから先を読むのでなければ、間違いなくヨハネが準備した迷宮の罠にはまり、黙示録を読み解くことが困難になります。一つ一つの文の意味を解こうとすると全体の意味がわからなくなるので、第17章を読むときには頭の中に以下のことを置いて、これらのうちに何について話しているのかを読みながら考えると、全体の様子が見えてくると思います。

- 1) 示現のこの時点ではサタンに従う人々は滅び、悪に従う人々が滅んだことでこの世におけるサタンの王国も最後を迎えようとしている。
- 2) ヨハネは神と聖約を交わす民とその教会を第19章から聖なる結婚の聖約に例えて説明するので、その聖約を破り、夫である神との交わり自ら断ち、神以外の者と交わりを持とうとする者を「淫婦」と呼んでいる。
- 3) 「7人の王」という表現も、7つの封印と同様の「悪の支配において」の時のピリオドを表すのかもしれない。
- 4) 「昔居て、今は居ないが、やがて来る」の説明については、このあと千年間サタンは縛られ、最後に一時的に開放されることを考えれば理解しやすくなる。

いずれにしても、どのような恐ろしい姿、形相であったとしても、聖徒は恐れる必要が無いことをヨハネは示唆しています。14節でははっきりと、わたしたちが信じる主こそが「主の主、王の王」なので必ず勝利すると説明しています。きっとヨハネはキリストが肉体を持って自分の師としてともにユダヤの地で活動していた時に、自分たちに向かってこう言われるのを思い出していたことでしょう。

「これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」（ヨハネによる福音書 16：33）

【第18章】 悪の王国は一日にして滅び

第17章に引き続き、サタンとその王国の最後が述べられている章です。第17章を天使によるヨハネに対してのその最後がどのようになるかの説明とするならば、第18章は天使による全世界に対する「サタンとその王国の敗北宣言」と呼べるかもしれません。この中で少なくとも3人の天使、あるいは声がこの宣言を行います。

ここは宣言ですので、文章的にも他と比べるとさほど読むのに難しくはありません。普通の聖典を読むように読むことができるでしょう。ただ、ヨハネが強調したい、ある言葉が（全く同じではありませんが）4回出てきます。その言葉とは「一日のうちに」あるいは「一瞬にして」です。ぜひ探してみて下さい。人々は生きている間にどうしても巨大な勢力に惹かれ、それこそが正しいものと勝手に解釈してしまいます。ヨハネはそういう思いに誘惑されてしまう聖徒に対して、それがいかにもろいハリボテの楼閣であるかと教えてくれているのです。モルモン書の中でもかつてこのように考えている人々が一日で予言通りに滅びるのを現実として見たという記録が残されています。

「彼らはまた、「たとえおまえが、この大きな町が一日で滅びてしまうと預言しても、我々はお前の言葉を信じない」と言った。」（アルマ書9:4）

「見よ、その町は一日で荒れ廃れた所となり、しかばねは犬と荒れ野の野獸に食い裂かれてしまった。」（アルマ書16:10）

イザヤもまたこの巨大な悪の王国が、神の栄光の力の前ではたった一日で簡単に滅んでしまう、とてももろいものだと説明しています。

「イスラエルの光は火となり、その聖者は炎となり、そのいばらと、おどろとを一日のうちに焼き滅ぼす。」（イザヤ書10:17）

【第19章】主と末日聖徒が出会う時と権威の移行

さあ、いよいよ黙示録はクライマックスである最後の時を迎えます。ヨハネは突然、天に響き渡る大群衆の喜びの声を聞きます（1-2節）。ヨハネはこの声の理由を「小羊の婚姻の時」（つまりシオンの完成の時）が来たからだと説明しています（7節）。当然のことながら、この章には婚姻の主人公である、花婿と花嫁が登場します。まず登場するのは花嫁でした。ヨハネがこの婚姻のときが来た理由を「花嫁がその用意をしたから」と書いています（7節）。花嫁は教会です。神の教会であり、キリストの教会です。特にこの時の場合のことを言えば「末日」聖徒イエス・キリスト教会のことです。

ヨハネは花嫁の準備が整うことを、その花嫁衣装が用意できた事にたとえています。「彼女は、光り輝く、汚れのない麻布の衣を着ることを許された。（8節）」。日本語の黙示録では「麻布」と書いてありますが、英語では「linen（リネン）」とありますので実際には「亜麻布」のことです。日本では亜麻は麻の一種とされていますが、実際には植物学的には異なる品種です。しかし、日本ではその植物纖維を使ってできた布の感触が麻に似たものを総じて「麻」と呼ぶので、黙示録もそのように訳されています。ただ、ここが亜麻布であることはとても重要です。

リネンという言葉を聞くと皆さんはおそらくホテルの真っ白なシーツやタオルを思い浮かべることでしょう。もともとホテルなどの布製品は丈夫で清潔な亜麻布で作られていたので、今のリネンという言葉はその名残です。亜麻という植物は真っ直ぐに伸びて育ち、しっかりとした繊維を生み出します。真っ直ぐというところから linen が転じて line (線) という言葉が生まれました。また白く、丈夫で美しく、肌触りも良いことから特に女性の肌着や下着が作られていたので、そこから lingerie (ランジェリー) という言葉が生まれました。亜麻にはそれ自体に抗菌作用もあって傷を塞ぐ包帯の役目もあり、十字架から降ろされたイエス様の遺体を包んだのもこの亜麻布でした。

ヨハネの時代、いろいろな繊維で作った物を様々な色に染めることは可能でしたが、逆に白くすることは大変困難でした。マラキ書に出てくる「布さらしの灰汁（マラキ 3:2 参照）」などは当時の漂白方法を表しています。灰（ソーダ）に漬け込んで洗い込んだり、太陽にさらしたり、様々な方法で人はなんとか白い布を作ろうとします。羊毛は白い布の代表ですが、厚さがあるので肌着として不向きです。絹は当時庶民にはとても手に入らないほど高価なものでした。軽く、丈夫で、清潔感があり、それで輝くほど白くすることができる布。当時、それは亜麻布だけができる技だったので。ですから、花嫁が身につける衣装にはこの亜麻が特に好んで使われていたようです。

ヨハネはこの真っ白に美しく縫製された花嫁衣装の意味を簡潔な言葉で表しています。



図9 美しい亜麻布で作られた花嫁衣装

「この麻布の衣は、聖徒たちの正しい行いである（8節）」

わたしたちの日々の行いは誰にも見られることなく、称賛されることもなく、知られることさえないかもしれません。それでも人知れぬところで行う私たちの小さな善行を天のお父様は静かに見ておられます。そしてその善行は、真っ直ぐで、真っ白な一本の亜麻の糸を育てます。一人一人の糸が集められ、紡がれ、そして織られて真っ白な布となり、それが丹念に縫製されて、やがて美しく輝く衣装が仕上がります。もし、この純白の花嫁衣装に黒いシミのある糸が使わっていたらどうでしょう。その婚礼はどれほど残念なものになるでしょう。ですから、真っ白な物を作り上げるために、聖徒たちは日々悔い改め、心を清く保ち、そしてまい進し続ける必要があるのです。

花嫁の準備が整った時、もう一人の主人公である花婿が登場します。しかし、その姿は花嫁とは異なるいでたちでした。

たは、「忠実で真実な者」と呼ばれ、義によってさばき、また、戦うかたである。その目は燃える炎であり、その頭には多くの冠があった。また、彼以外にはだれも知らない名がその身にしるされていた。 彼は血染めの衣をまとい、その名は「神の言」と呼ばれた。」（11-13節）

「またわたしが見ていると、天が開かれ、見よ、そこに白い馬がいた。それに乗っているか

第14章で説明したとおり、主は花嫁のために悪を滅ぼし尽くして婚宴の場にやって来られます。その姿は真っ赤な血に染まつた姿ではありますが、彼が乗る馬は白い馬であり、彼に続く、すなわち花婿の付添として来る人々も「純白で、汚れのない麻布の衣を着て、白い馬に乗り、彼に従つた。（14節）」と書いてあります。彼の口からは鋭い剣、すなわち「神の言葉」が出ており、その言葉をもって諸国民を治めます（ジョセフ・スマス靈感訳15節参照）。

二人が婚宴の場に来られた時、準備の最後の仕上げが行われます。それはサタンの投獄です。猛威を振るつたサタンはその権力を奪われ、やがてその権力のすべてが新しい支配者に移し替えられます。イザヤはこの重大な権力の移行を次のような言葉で表しました。

「万軍の神、主はこう言われる、「さあ、王の家をつかさどるこの執事セブナに行って言いなさい、『あなたはここになんの係わりがありますか。あなたはだれの縁故でここに自分のために墓を掘ったのですか。あなたは高い所に墓を掘り、岩をうがって自分のためにすみかを造った。強い人よ、見よ、主はあなたを激しくなげ倒される。主はあなたを堅くつかまえ、ぐるぐるまわして、まりのよう広々した地に投げられる。主人の家の恥となる者よ、あなたはそこで死に、あなたの華麗な車はそこに残る。わたしは、あなたをその職から追い、その地位から引きおろす。

その日、わたしは、わがしもベヒルキヤの子エリアキムを呼んで、あなたの衣を着せ、あなたの帶をしめさせ、あなたの権力を彼の手にゆだねる。彼はエルサレムの民とユダの家との父となる。

わたしはまたダビデの家のかぎを彼の肩に置く。彼が開けば閉じる者なく、彼が閉じれば開く者はない。

わたしは彼を堅い所に打ったくぎのようにする。そして彼はその父の家の薦の座となり、その父の家のすべての重さは彼の上にかかる。すなわちその子、その孫およびすべての小さい器、鉢からすべてのびんにいたるまでみな、彼の上にかかる」。万軍の主は言われる、「その日、堅い所に打ったくぎは抜け、切られて落ちる。その上にかかっている荷もまた取り去られる」と主は語られた。」（イザヤ書22：15-25）

執事セブナとはイザヤの時代に（あるいは伝承として）政治を利用して悪のかぎりを尽くしたと言われる人物です。このセブナがそのやりたい放題を行った場所にその主人が来て、しもベヒルキヤの子エリアキムに権威を移行すると宣言されます。このエリヤキムという人物は当時（あるいは伝承で）正直で真面目に政治を行ったと言われる人物です。さらに主人は続けてエリヤキムがそれを受ける理由を説明します。それは彼が釘のように固いところに打ち付けられて、その主人の家の人々のすべての重荷を負ったからですと。この権威の移行が行われる時、釘は抜けて、その重荷も彼から取り去られて、真の支配者となります。すべての人の重荷を背負って釘に打ち付けられた人物と言えば、皆さんにはこれが誰を指しているのかおわかりになられると思います。

こうして最後の戦いが起こり、サタンとそれに従う者たちの全ては捕らえられます。（19-21節）

【第 20 章】 第一の復活

ここからの默示録は神に従って生きようとする人々にとって、ただただ喜びの章が続きます。

まず、捕らえられたサタンとそれに従う者たちは千年間、「底知れぬ所」に投げ込まれ封印されます（1-3 節）。そして彼らのその先の行末の説明が 7 節から書かれていて、彼らは千年後に解放されて、最後の戦いを神に対して挑むけれども結局は負けてしまい、そして「滅びの子」と呼ばれ、かぎりなく苦しみの続く場所へと投げ込まれます。主は彼らについてこう言われました。

「すなわち、彼らは滅びの子であり、生まれなかつた方が彼らのためによかつたとわたしが言う者である。」（教義と聖約 76 : 32）

默示録を読むと福千年の前後で、神につく者とサタンたちとの大きな戦いが二度あることが分かれます。この戦いにはある人物が登場します。マゴグの地に住むゴグという人物です。彼はエゼキエル書 38-39 章の預言に登場し、ハルマゲドンの戦いの敵側の指導者と言われている人物です。言ってみれば、福千年前の戦いの続きが福千年後の戦いなので、一般的にはこれらを区別するように、最初の戦いのことをハルマゲドン、そして後の戦いをゴグ、マゴグの戦いと言います。しかし、戦う者たちはほぼ同じなので戦い自体に違いはありません。

サタンが一定期間縛られることによって生じる千年間を、わたしたち末日聖徒は「福千年」と呼びます。聖書では默示録にしかこのことが書かれていないため（実際にはいろいろなところで預言されているのですが）、一般的のキリスト教会ではこの教義はあやふやなものになっています。しかし、私達には現代に与えられた啓示により、これが特別な意味のある期間であることがわかっています。

福千年についてわかっていることは沢山あります。例えば教義と聖約の 101 章には細かくその詳細が書かれています。しかし、この福千年にはちゃんとした本来の目的があります。まず、理解していただきたいのは福千年とは時間のことです。そしてその舞台となる場所のことを私達は「シオン」と呼びます。すでにここまで読んできて理解されたように、地球は一つの大陸となり、それ自体がシオン、そして主であるイエス・キリストが私達と居てくださるので、悪人が住むことができず、ただ、神の教会だけが存在する場所のことです。

この広大な場所と、千年という長い時間は一体何のために準備されたのでしょうか？ヨハネはその答えを第 20 章で説明しています。

「また見ていると、かず多くの座があり、その上に人々がすわっていた。そして、彼らにさばきの権が与えられていた。また、イエスのあかしをし神の言を伝えたために首を切られた人々の靈がそこにおり、また、獸をもその像をも拝まず、その刻印を額や手に受けることをしなかつた人々がいた。彼らは生きかえって、キリストと共に千年の間、支配した。（それ以外の死人は、千年の期間が終るまで生きかえらなかつた。）これが第一の復活である。この第一の復活にあずかる者は、さいわいな者であり、また聖なる者である。この人たちに対しては、第二の死はなんの力もない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年の間、支配する。」（4-6 節）

ここを読むとキリストに従った人たちが復活することを「第一の復活」と呼ぶことが分かります。では、義人から復活するということは、これは裁きなのでしょうか？モルモン書の中でア

ルマがこれについて自分が聖霊によって知り得たことを息子コリアントンに説明しているところがあります。

「さて、このように述べられているこの第一の復活とは、霊の復活があつて幸福か不幸かの状態に置かれる事ではないと、私は考えている、これがそういう意味であると考えてはならない。見よ、私はあなたに言うが、そうではなく、それはアダムの時代からキリストの復活に至るまでの人々の、霊と体の再結合を意味する。」（アルマ書 40：17-18）

アルマは自分が受けた個人の啓示から、第一の復活というのは霊だけの復活でもなければ、それに伴う裁きでもないと説明しています。ではなぜ、最後の裁きでも無いのに人は蘇って、千年間も「最後の裁き」待つ必要があるのでしょうか？ ヨハネはこの理由を第20章の最後で説明しています。

「また見ていると、大きな白い御座があり、そこにいますかたがあった。天も地も御顔の前から逃げ去って、あとかたもなくなった。また、死んでいた者が、大いなる者も小さき者も共に、御座の前に立っているのが見えた。かずかずの書物が開かれたが、もう一つの書物が開かれた。これはいのちの書であった。死人はそのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれた。海はその中にいる死人を出し、死も黄泉もその中にいる死人を出し、そして、おのおのそのしわざに応じて、さばきを受けた。」（11-13節）

福千年は復活のために準備された時期です。すべての人が最後の裁きを正しく受けられるようにするために、靈界において福音を聞く機会が与えられ（教義と聖約138：30参照）、肉体を持った者たちが神の神殿の中で身代わりの儀式を行うことを通して、福千年の間の第一の復活にあずかるようにするために準備された、神の憐れみの公正な「期間」が福千年であり、天文学的な数字に登る人数の儀式を執り行うために、膨大な数の神殿を立てる「場所」として準備されるのがシオンです。神殿では記録のない人の儀式を執り行うことができないので、福千年では先に復活した人の記憶の力を借りて、正しい記録が作成され、アダムから現代に至る人々の儀式が執り行われます。そして義と定められた人たちの名は、いのちの書にその名前が書き込まれ次々に復活することができます。

教義と聖約から理解できるように、全員が同じように復活するわけではありません。第一の復活にあずかることができる長子の教会に属するものであり（教義と聖約76：54参照）、日の栄えの栄光を受ける者たちです（教義と聖約76：70参照）。この人たちの体は他の栄光の場所へ行く人達の体とは異なっています。例えば月の栄光に行く人々についてはこう書かれています。

「それゆえ、彼らは日の栄えの体ではなく、月の栄えの体であって、月が太陽と違っているように栄光において違っている。」（教義と聖約76：78）

人は最終的に『最後の』裁きを受けます。それは試しのプロセスにおける自分の努力に対する最終的な評価を受ける段階であって、約束された場所と約束された栄光を受ける大いなるイベントです。しかし、そのイベントに先立って、私達はすでにこの世での努力にしたがって、死ぬ瞬間から最終的な裁きの前段階の、言ってみれば「仮判断」を受けることになります。

「さて、死と復活の間の人の状態についてであるが、見よ、天使がわたしに知らせてくれたところによれば、すべての人の靈は、この死すべき体を離れるやいなや、まことに、善い靈であろうと悪い靈であろうと、彼らに命を与えられた神の身元へ連れ戻される。そして、義人の靈はパラダイスと呼ばれる幸福な状態、すなわち安息の状態、平安な状態に迎え入れられ、彼らはそこであらゆる災難と、あらゆる不安と憂いを離れて休む。さて、その時の悪人の靈の状態はといえ

ば、見よ、彼らは少しも主の御靈を受けずに、見よ、善い行いよりも悪い行いを好んだので・・・暗闇の中で、自分たちに下る火の憤りのような神の激しい怒りを、ひどく恐れながら待っている状態である。」（アルマ書 40：11-14）

つまり、人は死んだ瞬間に、ある程度の裁きを受けて復活までの期間を待つことになります。しかし、キリストの贖いの効力により、まだ真の福音を聞かずにこの世を去った者たちには、この靈界において福音を聞く機会が与えられます。ここで福音を受け入れるかどうかによって、第一の復活にあずかる者になれるかどうかの条件が定まりますが、福音を受け入れたとしても、靈の状態の彼らが復活にあずかるためには、現世で肉体を持つ者たちの身代わりの儀式による助けがどうしても必要となるのです。ジョセフ・スミスはこの点を明確に手紙に書き残しています。

「彼らなしにはわたしたちが完全な者とされることではなく、またわたしたちなしには彼らが完全な者とされることはないのです。」（教義と聖約 128：18）

さて、これらの人人が復活する時に行われるのがメルキゼデク神権による「復活の儀式」です。この儀式が行われる時、もはや黄泉は死んだものをその場所に留めておくことができなくなります。ヨハネが「海はその中にいる死人を出し、死も黄泉もその中にいる死人を出し」と書き残しているのはそのことです。死に打ち勝ったイエス様の持たれる神権の権能による儀式の前には、死を司る現象はなんの力も持たなくなります。

この復活の儀式が存在することは、ブリガム・ヤング大管長のある説教によって私達に知らされました。1872年8月24日のファーミントンで行われた集会の最後のまとめとして立ち上がったヤング大管長は、それまでに誰も聞いたことが無いような話をされました。

「私達の多くはこの世において救いと昇栄に必要なすべての儀式を手に入れて、それを行っていると考えているだろう。

しかし、それは正しくない。

たしかに私達はこの肉体において行うことのできる儀式の全ては受けている。しかし、この世を超えてからでないと受けることのできない儀式が存在するのである。

それにはどんな儀式があるのか皆さん知りたいと思う。
その一つを紹介しよう。

私達がまだ受けておらず、この世で行うこともできない儀式とその鍵とは復活である。」
(Journal of discourses Vol 15 page 135)

人は聖なる神権の儀式を通して復活します。ただ、全人類が同じように復活するかどうかは知らされません。なぜ「同じように」と言うかといえば、先程説明したように、日の栄えに行く者と月の栄えに行く者では異なる体に復活するからです。第一の復活と第二の復活では違う体が構成されるのです。多くの人は私達はお墓から復活すると考えておられると思います。それは聖書に死んだ人が「墓から出てきた」と最初の復活について書かれているからです。しかし多くの場合、それは「死んで墓に入ったはずの人が」という意味で書かれており、実際に墓から出てくるのを見たわけでは無いとも考えられます。なぜかと言えばヨハネが「墓から人が出てくる」とは書いてないからです。ただ、いのちの書にしるされている名前が神権の権能によって呼び出さ

れる時、死者をとどめ置く世界は彼らをその束縛から解き放つ必要があると書き残しているのです。

エゼキエルがその37章で復活の示現を見た時、多くの死者の骨を見たのは墓地ではなく、死の谷でした。やがて復活が起こった時に主の声が聞こえ、「見よ、私はあなたがたの墓を開き、あなたがたを墓からとりあげて（エゼキエル書37:12）」と復活の状態をあたかも「墓を開いて取り上げるように」と説明されたのです。モルモン書では復活を「墓から」ではなく「死人の中から」と説明しています（第三ニーファイ書23:9）。実際、アダムからノアの時代までの人の墓は大洪水によってすべて損なわれていますし、現在の地球上で存在するお墓の数は今までこの地上に居た人間の数に比べれば、本当に僅かなものです。さら第一の復活に先立って起こる人類がいまだ経験したことのない大地震によって大陸が一つとなる時、地上の墓自体が残っているともかぎりません。ですからすべての人が死んだ場所や、遺体が眠るであろう墓の場所からしか復活できないと考える必要はないのです。

ではどこで復活するのでしょうか？ それぞれに復活した体の行く栄光の場所が異なるように、もしかすると復活するその場所さえ、復活体の行く栄光の場所によっては異なる場所になるのかも知れません。証拠となるものは何一つありませんが、私がそう書く理由の一つは先程のブリガム・ヤング大管長のお話の冒頭が「皆さんに、神の家における、教義と儀式について少しお話しておきたいことがあります。」という言葉で始まっているからです。同じ話の中でヤング大管長は「福千年では、神の聖徒たちが次々に神の神殿を建て、儀式を行い、そして友や、懐かしい人たちが出てくるのを見ることになるでしょう。」と言われました。

私達が最後まで末日の聖徒として頑張り続けたその結果として、神の家の神権の儀式によって死の眠りから目覚める時、最初に何を見て、何を思うのかを考えるとワクワクしませんか？

【第21章】大団円

いよいよ黙示録は大団円を迎えます。この「大団円」という言葉は物語やお芝居がめでたくハッピーエンドに収まるという意味ですが、黙示録に限ってはこれは物語でも、お芝居でもなく、事実であり、必ずそうなるという預言です。5節で「これらの言葉は、信すべきであり、まことである。」と書かれているとおりです。ただ、神の聖徒たちにとってはハッピーエンドであることは間違ひありません。

第21章は第七の封印の世界、すなわちサタンが縛られた後のシオンを表すものと思われます。読み方によっては昇栄後の世界とも読むこともできるでしょうが、そこに書いてある部分部分の出来事が福千年の預言として今まで書かれてきたことに一致するところが多いからです。第1-2節にはこのように書いてあります。

「わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消え去り、海もなくなってしまった。また、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下って来るのを見た。」

すべての災いが終わり、イザヤが預言したように「もろもろの谷は高くせられ、もろもろの山と丘とは低くせられ、高低のある地は平らになり、険しい所は平地とな（イザヤ書40：4）」りました。今や、花婿と花嫁が一つとなり、一つの大陸、一つのシオンとなつた土地には新しい都と新エルサレムが出来上ります。ヨハネはその都が「天から下つて来るのを見た。（2節、10節）」と書いてありますので、エノクの民も含めての話なのかも知れません。

11節から21節まではその都の輝きをヨハネが精一杯の言葉で表現したのですが、輝きだけでも荘厳なものであったことが分かります。ヨハネの時代のあらゆる高価な宝石の名前が羅列されていて、まだガラスだけでも高価であった時代にこれだけの貴重な宝石をならべても、彼が見たシオンの輝きを具体的に表現することは難しかったでしょう。それは22-23節の説明よっても理解することができます。

「わたしは、この都の中には聖所を見なかつた。全能者にして主なる神と小羊とが、その聖所なのである。都は、日や月がそれを照す必要がない。神の栄光が都を明るくし、小羊が都のあかりだからである。」

王として来られた主イエス・キリストは、おそらくこのときにはもう、血染めの赤い衣は着ておらず、神の栄光を身にまとわれておられるので、国全体が輝きに満たされています。

【第22章】聖徒の勝利とその喜び

ヨハネは感動のうちに黙示録を締めくくります。ヨハネの感動の原点は自分が愛し、信じてきた主が本当の主であることと、神の聖徒たちがあらゆる艱難を乗り越えて最後まで戦い続けて勝利したことにあります。言葉をどれだけ重ねても、この感動はそれを見るものにしか実感することができないことを知つてのことか、ヨハネはこの黙示録の示現を最後にとても簡潔な言葉で締めくくっています。

「夜は、もはやない。あかりも太陽の光も、いらない。主なる神が彼らを照し、そして、彼らは世々限りなく支配する。」（22：5）

福千年には、さらにそれに続く日の栄えの王国には夜はありません。主が、その光の根源であり、さらに私達が昇栄するときには私達自身が光となるからです。

そこには病気も死も、苦しみも、悲しみも、叫びも、そして涙もありません。主が拭い取ってくださったからです。（イザヤ書25：8、黙示録21：4参考）

以上がヨハネが見た示現です。最後にヨハネは第1章と同じように、この黙示録を書いた人物の名前を繰り返しています。

「これらのことを見聞きした者は、このヨハネである。」（8節）

こうしてニーファイが見た証が完成するのです。

最後にヨハネは天使から告げられた言葉を書き記しています。

「またわたしに言った、「この書の預言の言葉を封じてはならない。時が近づいているからである。不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ」。」（10-11節）

エテル書に書かれてあるように、ヤレドの兄弟は自分の見た驚くべきことを記録にし、しかし、それを封じるよう言わされました。それをニーファイの言葉に改訳したモロナイも同じように封じるよう命じられました（エテル書3-4章）。それはその内容が最後に人類に明らかにされる答え合わせだからです。ヨハネが書いたものは逆に封じないようにと命じられました。それは人々が神様の最後の計画と、そのために働く人達が居ることを最初から人類に知らせるためでした。

多くの人がこのヨハネの默示録を理解しようと様々な憶測でチャレンジしてきました。しかし、最初の7つの教会にあてた手紙に書かれているように、「御靈の言うことを聞」かなければ決して理解することはできないと思います。

【まとめ】

この「読み方の解説書」は默示録の「解説書」ではなく、あくまでも「読み方の解説書」であり、皆さんも、默示録を読み始めるきっかけになるためのほんの一例にしか過ぎません。

イザヤ書もヨハネの默示録も、末日の聖徒が自らのこの世での使命を理解しようとして読み始めるための導き手であり、そして聖霊から日々教えを受けるという習慣を身につけるためのすばらしい訓練ツールです。

この世に居る間に私達に神様の御心を教えてくださるのは神様ご本人であって、他の誰でもありません。そしてその御心を理解するために間に立ってくださるのが聖霊です。

わたしたちの主であるイエス・キリストのそのお名前を通して祈る時に、神様は聖霊を通してわたしたちに、わたしたちが今まで思いもしなかった真理を明らかにしてくださいます。

「また、この記録を受けるとき、これが真実かどうかキリストの名によって永遠の父なる神に問うように、あなたがたに勧めたい。もしキリストを信じながら、誠心誠意問うならば、神はこれが真実であることを、聖霊の力によってあなたがたに明らかにしてくださる。そして聖霊の力によって、あなたがたはすべてのことの真理を知るであろう。」（モロナイ書 10：4-5）

この言葉はヨハネの默示録においても真実です。

皆様の上に神様の祝福がありますように。この資料が皆様の聖典勉強の助けとなることを願ってやみません。

黒木 俊宏

初版 2021年7月20日

第二版 2021年8月5日

第三版 2021年8月26日

第四版 2021年11月19日

第五版 2022年8月21日